

## 唐代仏教石刻文の研究 (二)

大内文雄編

### はじめに

前年度において解説作業を進めた僧・尼、あるいは優婆塞の塔銘・墓誌については、その中の一一種に対し、釈文と訓読を付して研究紀要第一七号に掲載した。研究班二年目となる本年度では、それらに引き続き、より長文の碑文を解説の対象とした。それらの中、本号では左記の等慈寺碑、道德寺碑、大智禪師碑、隆闡法師碑の四種を掲載する。前号と異なり、本号では釈文・訓読には適宜に段落を設けるとともに、必要な語釈をも付している。また、前号に掲載しなかった義福塔銘と景賢大師身塔石記は禪宗関係史料として大智禪師義福碑に附し、同様に浄業法師靈塔銘は浄土教関係史料として隆闡法師碑に附している。碑文の持つ特徴については、それぞれの解説担当者によって解題がなされており、詳細はそれらに譲るが、以下簡単に、その内容について記す。

碑名	成立年次	担当者
大唐皇帝等慈寺之碑	太宗貞観 二年（六二八）	丸橋充拓
大唐京師道德寺故大禪師大法師之碑	高宗顯慶 三年（六五八）	松浦典弘

大唐故大智禪師碑

玄宗開元二十四年(七三六)

福井 敏

大智禪師碑陰記

開元二十九年(七四一)

福井 敏

附 義福塔銘

開元二十四年(七三六)

山野俊郎

景賢大師身塔石記

開元二十三年(七三五)

佐藤義寛

大唐實際寺故寺主懷惲奉勅贈隆闍大法師碑

天宝 二年(七四三)

今場正美

附 淨業法師靈塔銘

開元一二年(七二四)

織田顯祐

等慈寺碑は、広弘明集卷二八に収録されている「唐太宗於行陣所立七寺詔」に明らかのように、唐朝政権による隋末群雄の平定後、特に華北における戦陣の地七所に寺院を建立し立碑した中の一つである。碑には竇建徳の勢力の平定と唐朝の権威確立を述べる。河南省の滎陽に現存する。撰文は顔師古、書者は不明である。

道徳寺碑と言われるこの碑は、実は尼寺である道徳寺ゆかりの善恵禪師、玄懿法師二人の事跡を記す。時代は東魏北斉・北周から隋を経て唐高宗朝に及ぶ。善恵は隋煬帝の大業六年、玄懿は同一一年に没しているが、この両者は大業元年に煬帝の嗣子元徳太子の戒師となっており、隋朝の帝室と密接な関係にあった。なおこの碑は、一九五〇年に西安より出土した新出史料である。西安碑林に現蔵する。

大智禪師碑は、唐代禪宗の中、北宗禪の創唱者神秀の弟子義福の碑である。師の神秀は武周時代に活躍したが、義福は玄宗の開元時代に普寂と共に活動した。唐代文化の極盛期における禪宗史研究の重要史料である。撰文は嚴挺之、書は史惟則による。西安碑林に収められている。景賢大師身塔石記は同じく神秀の弟子景賢の事績を伝えるものである。

開元一一年(七二三)に嵩山会善寺に没している。

隆闍法師碑は、唐・善導の弟子懷惲の碑である。西安碑林に保存されているこの碑は、行書の名碑として古来名高い

が、また中国浄土教史上、最も重要な石刻史料の一つである。碑文中に「親証三昧大徳善導闍梨」とあり、師善導の没後、長安神禾原の善導の兆域に靈塔を建立し、大塔を造ったのも懷惴であった。また武周時代に入り、長安實際寺主となっており、武周時代の浄土教の一端を知ることのできる史料でもある。なお碑文中に隆闡大法師号を贈る際の勅文が保存されている（第一〇段落）ことや、浄業法師靈塔銘に法会の際の寄進の模様が記されている等は、善導没後の中国浄土教の実態を窺わせていて興味深い。

最後に、二年間にわたる研究班に常時協力いただいた諸先生方に対し御礼申し上げたい。とりわけ解説担当の諸氏は、多大の時間と労力を提供していただいた。重ねて厚く御礼申し上げたい。唐代の仏教に関わる石刻文は膨大な数に上る。今回組織された研究班による研究・解説はその一端に触れたに過ぎないものではあるが、これらの解説を通して新たな研究成果も生まれており、今後この方面の研究には取り組んでいきたいと思う。

## 一 大唐皇帝等慈寺之碑

## 〔解題〕

等慈寺は河南省鄭州市滎陽県にあり、唐の太宗皇帝の詔によって貞観三年（六二九）に建設が始まり、一〇年ほどの歳月をかけて落成したとされる。この詔（『広弘明集』巻二八）の中で彼は、唐朝による天下統一の過程で彼自身が滅ぼした群雄および戦没兵たちを供養すべく、普濟寺・昭仁寺・慈雲寺・弘濟寺・等慈寺・昭覺寺・昭福寺の合計七寺を各地に建てるよう命じ、造立の縁起を記した碑文をそれぞれ許敬宗・朱子奢・褚遂良・李百葉・顔師古・虞世南・岑文本という何れも当代一流の文臣たちに撰述させた。これらのほとんどは歳月を経て亡佚してしまったが、ここで取り上げる「等慈寺碑」は「昭仁寺碑」とともに今日なお目睹できる貴重な石刻である。

等慈寺を始めとする七寺造営の趣旨については、建寺詔に主拠して戦死者慰霊を目的と捉える意見や、唐初における仏教統制政策の一環とする主張、あるいは太宗の武功顕彰という面を重視する立場、等が示されてきた。以下の「等慈寺碑」全文を遺漏なく読み込んでいけば容易に了解されるように、碑文の大半は太宗の業績美化に費やされており、第三説の言うところに主眼が置かれていたことは明らかである。七寺が、群雄平定後かなりの年月を経た貞観年間に起工されていることも、そう考えれば説明がつく。また、同じく現存する「昭仁寺碑」には太宗への賛辭が単調に並べられるばかりでなく、玄武門の変という彼の経歴に傷をつけかねない事件を巧みに糊塗し、その即位が天意・民意の支持を受けたものだったことを強調するような文言さえも見受けられる。こうしたことを考え合わせるに、一連の事業は単なる一宗教政策の枠組に留まらず、「太宗政權の正統化」というむしろ政治的な文脈において理解されるべきものである。

る。(以上、拙論「唐太宗の紀功寺院建設―政權正統論の形成をめぐる―」大谷大学史学論究第七号、二〇〇一、を参照。)

「等慈寺碑」の拓本は関野貞・常盤大定編『中国文化史蹟』(原題『支那文化史蹟』、宝蔵館、一九七五―七六)第五冊や、『書跡名品叢刊』第一三五冊『唐顔師古等慈寺碑』(二玄社、一九六九)、『北京図書館蔵中国歴代金石拓本匯編』第一一冊(北京図書館金石組編、中州古籍出版社、一九八九)等に収録され、前二書には常盤氏・杉村邦彦氏による解題が付されている。録文は『金石萃編』巻四二や『全唐文』巻一四八に見ることができ、前者にはあまたの金石書から按語が引用されていて有益である。

撰者顔師古は言うまでもなく名族琅邪顔氏に出自する。祖父は北斉に仕え、『家訓』を以て名高い顔之推である。師古とは字で、諱は稽という。隋文帝の時代に起家したが、罪に連座して官を辞し、その後一〇年にわたる貧窮生活を送る。ところが唐の高祖が兵を挙げるといち早く麾下に参じて、李世民(当時煬煒公)の幕僚に任ぜられた。のち彼自身は中央において出世を遂げ、高祖政權の枢要を占めることになるが、その間にも父思魯と弟相時が李世民(当時秦王)の幕僚となっており、秦王とのつながりは保持していたと考えられる。玄武門の変を経て太宗朝が樹立された後も引き続き中書侍郎として敏腕を振るい、政權の安定に大きく寄与した。唐初の文化政策においてもその功績は大きく、『五経正義』編纂に際してはその校定作業を担当した。また家学を継承してまとめ上げ、史学史上に不朽の足跡を刻んだ『漢書注』を始め、数多くの著書を世に送り出している。(以上、『旧唐書』巻七三、『新唐書』巻一九八の本伝を参照。)(丸橋充拓)

# 「釋文」

若夫有功可大。盛業光於四表。有親可久。厚德加於萬類。救災撥亂。闡宏威以則天。立愛宣慈。垂至仁而濟物。其於司牧黎獻。汲引羣生。窮高極深。道隆化國。伏以現神通ノ力。摧破波旬之兵。開方便門。消滅尼犍之罪。斯蓋法王聖跡。調御善權。不可思議。莫知邊際者矣。

自隨曆云季。政網不綱。海岳沸騰。函夏圯裂。繩樞競起。白挺構兵。毒卉<sub>冬</sub>敷。妖精晝隕。五山竝食。九嬰爲害。交相吞噬。恣行剗斲。仰籲蒼昊。踟跡靡依。俯墜塗炭。息肩無所。

剝極則亨。否終斯泰。用集明命。爰啓眞人。我大唐皇帝。慶發靈圖。祚昭寶籙。撫茲歸運。拯彼橫流。惟神惟幾。

廻文廻武。聰明時乂。勇智自天。猗歟五材。聖質苞其純懿。大哉七德。宸鑒測其幽遠。至如封胡異說。力牧奇篇。

玄女黃石之精。微。玉帳絳宮之祕要。莫不裁成。睿思。總制深衷。超冠情靈之表。得諸耳目之外。爰茲草昧。自彼參墟。

投袂濡足。東征西怨。克翦方命。鯨鯢斯盡。芟夷千紀。邦域底平。掃櫓槍於天衢。匪遑寧處。戮獮狂於地表。無思不服。

阪泉涿鹿之師。語勤已陋。共工有扈之戰。固多慙色。載籍所傳。孰可俟其髣髴。言象所寄。安足紀其希夷。

武德之初。諸華未緝。穀<sub>陷</sub>之地。尙阻朝風。念彼王充。偷安假息。悼干戈之日用。悵烽燧之多警。於是親總元戎。

授茲威鉞。建瓴東下。將一車書。北據崇芒。南屯伊闕。雲羅旣布。指期滌蕩。然而賊<sub>寶</sub>建德。往因多難。夙長亂階。

僞黨寔繁。凶毒孔熾。妄作玄圭之瑞。竊號夏王。驅扇黑山之旅。擅強河朔。破邑屠城。斬祀殺厲。矯誣上帝。多歷年所。

又以逞其狙詐。乘彼阽危。□□許之人徒。收亡隨之文物。遂乃憑凌濟岱。荐食徐兗。驟勝愈驕。負力作氣。惟茲勦寇。

同惡相求。暨此役也。寔來赴援。溯流而上。奄至滎陽。閒使驅馳。潛申約結。將規合勢。以抗我師。首足互資。實同夏

屋之獸。前後迭至。冀效常山之蛇。妙算所甄。洞其曲折。中權所稟。見可而進。是以引麾北制。移蹕東虞。天策頻

加。神鋒累奮。其後酋渠相命。妖孽竝臻。鑿齒之類爲羣。竄竄之徒成列。發自板渚。迄于茲地。獷獫爭先。陸梁競

出。比角舉尾。飲竭洪流。吞石噉沙。聚蔽陽景。皇赫斯怒。爰敕六軍。飛廉翊衛。豐隆先路。然後置天地之陣。揚

日月之旗。震疊鼓以申嚴。鏗<sub>鐘</sub>而大號。星流電擊。鳳矯龍騰。丘轡爲之<sub>震</sub>跳。梗林於是靡拉。陷堅挫猛。刮野掃地。

喋血僵尸。填坑滿谷。禽茲元惡。未及旋踵。仍執醜虜。曾靡子遺。渙若冰消。漕同魚爛。氛祲祛<sub>除</sub>。風雲融<sub>朗</sub>。列代

神璽。莫不畢收。前王彝器。此焉總獲。旣而乘轅西返。蒨旆石臨。奮決水之威。乘破竹之勢。廓清萬里。大定三川。

散馬華陽。飲至豐鎬。豈如漢王力競。屢見<sub>屈</sub>於城阜。魏武爭<sub>隄</sub>。久連兵於官渡。

及夫海外有截。宇內無虞。執玉帛以臨朝。垂衣裳而班治。珎／符雜沓。繁祉網縈。甘雨薰風。時和載稔。正簫韶之樂。非止咸英。定郊雍之靈。豈唯俎豆。跂行喩息。跼實排虛。邇陝游原。遐闊泳末。攬摯忘嘴距之用。夷狄齊冠帶之倫。外戶／常開。內機不作。實含靈於仁壽。變品庶於陶甄。

思廣舟航。無隔幽顯。靜言官首。或握節以殉忠。追悼行閒。有埋輪而棄野。愍疏屬之罪。方滯迷塗。念刑天之魂。久淪長夜。以／爲拔除苦累。必藉勝因。增益善根。寔資淨土。乃命克敵之處。普建道場。情均彼我。恩洽同異。爰立此寺。俾號等慈。境實鄭州。縣稱汜水。班倕既集。矩矱斯備。式構寶坊。樹／茲靈塔。飛梁虹指。浮柱星懸。層閣崢嶸。脩廊黼黻。朝雲暫起。華礎流津。曉露微霑。雕盤泫漣。茹蘆在阪。化爲瞻蔔之林。熠燿宵行。翻映摩尼之彩。傍開奈苑。敷淨花而華暉。／却帶蓮池。積定水而澄湛。結衣萃止。振錫來儀。戒品齊芳。禪枝竝茂。其地則遙瞻太室。夏后之所發祥。近眺襄城。軒轅於是訪道。舳艫控引。循金堤以偃側。冠蓋往來。趣玉／門而隱軫。勢居爽塏。物稱衍沃。誠原陸之膏腴。信康莊之都會。豈唯致罰之野。獲免汚豬。淫惡所懲。赦其京觀。

乃令深入緣起。永離蓋纏。普賴法財。同歸妙樂。悠悠曠劫。憑／慧力而靡偏。亶亶恆沙。譬福聚而無盡。南山之壽。既彌茂於億年。北極之尊。實牢籠於萬代。竊惟望雲就日。博貫多能。理極寰中。道臻繫本。考覈篆籀。徧詳流略。定儒墨之／短長。棄刑名之苛繞。纖微必舉。幽蹟斷應。不能遁其隱奧。無所潛其舛響。五老變爲流星。懸識象緯。八靈附於積雪。曲盡物名。晨食忘勞。昧旦丕顯。尙想巖穴。博逮芻蕘。俱／幸滿堂之歡。猶興納隍之慮。愛踰祝網。仁兼扇喝。降玄覽而游藝。觀人文以化成。賤齊梁之短篇。鄙苦寒之危調。轉規注河之論。聽者開神。芝英垂露之書。覩者眩目。飛／媛妙術。抑咒神工。制律呂之輕重。知草木之情狀。郁哉煥乎。弗可記已。重明養德。守器光於匕鬯。璇枝樂善。作固列於維城。國儀抑抑。良翰趑趑。文士蘊金錫之姿。武臣表／熊羆之狀。耕田鑿井。雖受賜而無跡。擊壤鼓腹。諒日用而不知。百年然後勝殘。仲尼之言斯闢。三春之芽難致。夷吾所志爲小。蓋夫植操恆久。莫／貞乎金石。盛德形容。聿宣／於歌頌。末臣庸謏。預奉 鴻猷。雖罄短才。未揚休烈。其詞曰。

肇自元極。初分太清。二儀定位。四大居貞。緬求遂古。逖聽遐聲。質文遞變。粹駁殊名。其一。季業紛詭。政荒道喪。逐鹿爭驅。乘龍有亢。亟罹不造。時逢无妄。至治莫興。嘉生靡暢。其二。滔德既厭。炎運將徂。鴻飛野滿。狼入朝燕。綠林叛換。青犢睢盱。中外板蕩。億兆命胥。其三。聖帝膺期。愍彼顛覆。始建天柱。初安地軸。方難畢夷。羣凶盡戮。芒芒率土。俱荷亭育。其四。壽華霽社。用康國步。陽紆斃惡。實清王土。牧野非艱。鳴條豈固。勢踰漳卷。俯同榮注。其五。魔衆既摧。勝幡斯立。釋茲罪垢。俾伸幽執。施以無畏。斷其餘習。卽此戎墟。招提攸葺。其六。雲樓赫燁。月殿玲瓏。冬延愛景。夏納清風。白蘋齊業。丹桂連藂。綺疏瞰迴。繡栊凌空。其七。金繩吐光。寶鈴和響。香繞梵音。花飛仙掌。妙相凝寂。眞容煥朗。開士宅心。伊蒲瞻仰。其八。崇巖秀峙。迅流長邁。石城迴矚。龍池斜界。左顧敖碕。右通汜鄒。寔惟勝境。誕標靈怪。其九。至人惠利。正覺津梁。偕登萬善。普照十方。深慈廣傳。冥慶遐長。式光勿替。永播無疆。其十。

通議大夫。行祕書少監。輕車都尉。琅邪縣開國子。臣顏師古。奉 敕撰。

# I 序 言

## 〔訓読〕

若夫功有ること大なるべくんば、盛業は四表に光いにし、親有ること久しかるべくんば、厚德は万類に加えられる。災を救い乱を撥め、宏威を闢きて以て天に則り、愛を立て慈を宣べ、至仁を垂れて物を濟う。其の黎猷を司牧し、群生を汲引するにおけるや、高きを窮めて深きを極め、道隆くして化遠し。伏して以えらく、神通力を現じて、波旬の兵を摧破し、方便門を開きて、尼犍の罪を消滅するは、斯れ蓋し法王の聖跡、調御の善権にして、思議すべからず、辺際を知る莫き者なり。

〔語釈〕

【波旬】 Pāpavyasの音訳。欲界第六天の主。憎む、殺すの意。仏法を憎み仏僧殺害を事とする。『注維摩詰經』四「什曰、波旬、秦言殺者。常欲斷人慧命、故名殺者。」（大三・三八・三六五中）、『百喻經』小兒得大龜喻「天魔波旬、及惡知識、而語之言『汝但極意六塵、恣情五欲、如我語者、必得解脫。』」（大四・五五七下）

【尼健】 あるいは尼乾。Nirgranthaの音訳。外道出家の総名。『注維摩詰經』三「鞞曰、尼健陀、其出家總名也。如仏法出家名沙門。若提、母名也。其人謂罪福苦樂本有定因、要當必受、非行

## II 隋の衰亡

〔訓読〕

随（隋）曆云に季にして、政網綱<sup>す</sup>べざりしより、海岳は沸騰し、函夏は圯裂し、繩樞は競って起き、白挺もて兵を構え、毒卉は冬に敷き、妖精は昼に隕つ。五山は並びに食して、九嬰は害を為し、交ごも相い呑噬して、恣に刳断を行う。仰ぎては蒼昊を籲<sup>よ</sup>びて、跼跡（躅）するに依る靡く、俯しては塗炭に墜ちて、息肩するに所無し。

〔語釈〕

【繩樞】 縄で扉の開閉の軸（枢）を括ること。転じて貧困な様。賈誼『新書』過秦上「然而陳涉甕牖繩樞之子、氓隸之人、而遷徙之徒也。」

【毒卉冬敷】「冬」は『全唐文』では「久」に作るが、『文選』卷二五・晋・劉琨・答盧諶詩并書の「英蕊夏落、毒卉冬敷。（注…

道所能断也。」（大三・三五一上）

【調御】 一切衆生を狂象惡馬にたとえ、仏を象馬師にたとえて調御という。『無量義經』德行品「調御大調御、無諸放逸行、猶如象馬師、能調無不調。」（大九・三八四下）

【善權】 巧みに説法して人々を悟りに導くこと。『維摩經』仏國品「菩薩行善權方便故、於仏國得道、一切行權攝人為善生于仏土。」（大一・四・五二〇中）

英蕊以喻晋朝、毒卉以比胡寇也。」と言う一節を踏まえると考え、改める。

【九嬰為害】 九嬰は伝説中の怪物。邪惡残酷な人の形容にも用いる。『淮南子』本經訓「猋螭・鑿齒・九嬰・大風・封豨・脩蛇、皆為民害。（高誘注…九嬰、水火之怪、為人害。）」

【剗斷】斬殺すること。『宋書』卷七四・沈攸之伝「〔順帝〕遣攸之長子司徒左長史元琰齎廢帝剗斷之具以示攸之。」

【仰籲蒼昊】『書』召誥「夫知保抱携持厥婦子、以哀籲天、徂厥亡、出執。」同・泰誓中「無辜籲天、穢德彰聞。」

### III 唐の挙兵

#### 【訓読】

剗極まれば則ち亨り、否終れば斯に泰たり。用て明命を集め、爰に真人を啓く。我が大唐皇帝、慶いは靈圖を発して、祚<sup>さいわ</sup>いは宝籙を昭らかにし、茲の帰運を撫して、彼の横流を拯う。惟れ神にして惟れ幾、廻ち文にして廻ち武なり。聰明の時父、勇智は天自りす。猗<sup>おほ</sup>いなるかな五材、聖質は其の純懿を苞む。大いなるかな七徳、宸鑑は其の幽遠を測る。封胡の異説、力牧の奇篇、玄女・黄石の精微、玉帳・絳宮の秘要の如きに至りては、睿思に裁成して、深衷に綏制し、情靈の表に超冠して、諸を耳目の外に得ざるもの莫し。爰に茲の草昧、彼の参墟自りす。袂を投じ足を濡らして、東に征てば西怨む。方命を克翦して、鯨鯢斯に尽き、干紀を芟夷して、邦城底に平らかなり。櫓槍を天衢より掃きて、寧処に遑匪ず、獷狂を地表より戮して、服せざる無し。阪泉・涿鹿の師、勤を語るも已だ陋たり、共工・有扈の戦、固より慙色多し。載籍の伝うる所、孰れか其の髣髴を倅<sup>ひと</sup>しくすべけんや。言象の寄する所、安んぞ其の希夷を紀すに足らんや。

#### 【語釈】

【剗極則亨】『易』剗「剗、不利有攸往」、『易』復「復、亨。出入无疾、朋来无咎、反復其道、七日来復、利有攸往」。「剗極將復」などとも言う。

【否終斯泰】泰は通ずる、否は滞る。凶運が去って幸運がめぐってくる。『易』泰「彖曰、泰…則是天地交而万物通也。」同・

否「彖曰、否…則是天地不交而万物不通也。」序卦「泰者、通也。物不可以終通、故受之以否。」漢・趙曄『吳越春秋』勾踐入臣外伝「時過於期、否終則泰。」

【惟神惟幾】『易』繫辭下「子曰、知幾其神乎。…幾者動之微、吉之先見者也。君子見幾而作、不俟終日。」、『文心彫龍』論說「次

及宋岱・郭象、鋭思於幾神之区。」

【五材】 五種の徳性。『六韜』龍韜「所謂五材者、勇智仁信忠也。」

【七徳】 『左伝』宣公一二年六月「夫武、禁暴、戢兵・保大・定功・安民・和衆・豊財者也。故使子孫無忘其章、…武有七徳、我無一焉、何以示子孫。」

【封胡異説・力牧奇篇】 封胡・力牧の著した兵書。両者は何れも黄帝の家臣。『漢書』芸文志・兵書・陰陽家の項。

【玄女】 伝説中の神女。黄帝兵法を授けられ、蚩尤を征服した。『史記』五帝本紀・集解所引「龍魚河図」、「雲笈七籤」巻一〇〇・軒轅本紀、同巻一一四・九天玄女伝等。

【黄石】 黄石公。張良に兵書を授けた。『史記』留侯世家。

【玉帳絳宮之秘要】 玉帳には幕営、絳宮には心臓の意味がある。『北齊書』巻四五・顔之推伝・觀我生賦「守金城之湯池、軫絳宮之玉帳。」、宋・張洎『雲谷雜記』「芸文志有玉帳絳一卷、乃兵家厭勝之方位。謂主將於其位置軍帳、則堅不可犯、猶玉帳然。其法出於黄帝遁甲、以月建前三位取之、如正月建寅、則已為玉帳、主將宜居。」

【參墟】 参星の領域。山西・河南一帯を指す。『左伝』昭公一五年一二月「唐叔受之、以処參虚（杜注・參虚、実沈之次、晋之分野。）」

【投袂】 激しい怒りの形容。『左伝』宣公一四年秋「楚子聞之、投袂而起。」

【濡足】 濡れて汚れる。『楚辭』九章・思美人「因芙蓉而為媒兮、

憚褰裳而濡足。（王逸注・…又恐汚泥、被垢濁也。）」

【東征西怨】 四囲の民が少しでも早く聖王に征服され、その徳政に浴したいと願うこと。『書』仲虺之誥「惟王不邇声色、不殖貨利、徳懋懋官、功懋懋賞、…東征西夷怨、南征北狄怨、曰奚独後予。」

【方命】 命に違う、抵抗する。『書』堯典、左思・魏都賦。

【鯨鯢】 凶惡な敵。『左伝』宣公一二年六月「古者明王伐不敬、取其鯨鯢而封之、以為大戮。」

【芟夷】 切り除く。『隋書』經籍志四「晋代摯虞、苦覽者勞倦、於是採摘孔翠、芟夷繁蕪、自詩賦下、各為条貫、合而編之、謂為流別。」

【千紀】 法規に違反する。『左伝』襄公二十三年一〇月「千国之紀、犯門斬閔。」

【機槍】 参星の別名。転じて邪惡な勢力の比喩。『爾雅』釈天。

【獠狂】 『文選』巻七・揚雄・甘泉賦「属堪輿以壁壘兮、捎夔魑而扶獠狂。（李善注・…孟康曰、…獠狂、亦惡鬼也。）」、『文選』巻三・張衡・東京賦にもあり。

【無思不服】 思は虚字。『詩』大雅・文王有声「自西至東、自南至北、無思不服。」

【阪泉涿鹿之師】 阪泉は山西省陽曲県の東北で、黄帝が神農氏と戦ったところ。涿鹿は黄帝が蚩尤と戦ったところ。『史記』五帝本紀。

【共工有扈之戰】 共工は顓頊によって、有扈氏は夏二代啓によつ

て討たれた。『書』堯典／甘誓、『史記』五帝本紀／夏本紀、『淮  
南子』兵略訓。

#### IV 対竇建德・王世充戦の経過

##### 〔訓読〕

武徳の初め、諸華未だ緝<sup>おさ</sup>まらず、穀洛の地は、尚お朝風を阻む。念うに彼の王〔世〕充は、安を偷み息を假れり。干戈の日ごとに用いらるるを悼み、烽燧の警多きを悵む。是において親しく元戎を総べて、茲に威鉞を授け、建瓴東に下り、將に車書を一にせんとす。北のかた崇芒に抛り、南のかた伊闕に屯し、雲羅既に布けば、期を指して滌蕩せんとす。然り而うして賊□竇建德、往に多難に因りて、夙に乱階を長くし、偽党寔に繁くして、凶毒孔だ熾んなり。玄圭の瑞を妄作して、夏王を窃号し、黒山の旅を驅扇して、強を河朔に擅まにす。邑を破り城を屠り、祀を斬り厲を殺し、上帝を矯誣して、多く年所を歴たり。又た其の狙詐を逞しうして、彼の阨危に乘じ、□許の人徒を□して、亡随(隋)の文物を取むるを以て、遂に乃ち済岱に憑凌して、徐充に荐食し、驟かに勝ちて愈いよ驕り、力に負みて氣を作す。惟れ茲の勦寇は、同惡相求め、此の役に暨ぶや、寔に來りて援に赴く。流れを溯りて上り、奄ち滎陽に至り、間使驅馳して、潜かに約結を申べ、將て合勢を規りて、以て我が師に抗う。首足互いに資くるは、實に夏屋の獸に同じく、前後迭に至るは、常山の蛇に效うを冀うなり。妙算の甄<sup>しめ</sup>す所は、其の曲折を洞<sup>あき</sup>らかにし、中權の稟くる所は、可を見て進む。是を以て麾を北制に引きて、蹕を東虞に移し、天策頻りに加わり、神鋒累りに奮う。其の後、魯渠相命じ、妖孽並びに臻り、鰲齒の類、群を為し、窳窳の徒、列を成す。板渚自り発して、茲の地に迄るまで、獷發して先を争い、陸梁して競い出で、角を比べ尾を挙げて、飲みて洪流を竭し、石を呑み沙を噉らいて、聚りて陽景を蔽す。皇、赫として斯に怒り、爰に六軍に勅して、飛廉衝を翊け、豐隆路に先んじ、然る後に天地の陣を置きて、日月の旗を揚げ、夔鼓を震わせて以て申敵し、虬鐘を鐸<sup>つ</sup>きて大号す。星のごと流れ電のごと撃ち、鳳のごと矯<sup>と</sup>び龍のごと騰がる。丘轡之が為に震跳し、梗林

是に於いて靡拉す。堅きを陥して猛きを挫き、野を刮きて地を掃き、喋血僵尸、坑を填め谷に満つ。茲の元惡を禽えて、未だ旋踵に及ばざるに、仍お醜虜を執えて、曾ち子遺靡し。渙けること氷の消ゆるが若く、灌ぐこと魚の爛るに同じ。氛祲は祛除せられ、風雲は融朗たり。列代の神璽、畢く收めざるは莫く、前王の彝器、此れ焉に総て獲たり。既にして乗輿は西返して、蒨旆は右臨し、決水の威を奮いて、破竹の勢に乘じ、万里を廓清して、三川を大定し、馬を華陽に散じて、豊鎬に飲至す。豈に漢王の力め競うも、屢しば城皋に屈せられ、魏武の雄を争うも、久しく兵を官渡に連ぬるが如くならんや。

【語釈】

【穀洛之地】 穀水と洛水の流域。王世充の拠っていた洛陽の周辺。

【親総元戎、授茲威鉞】 武徳三年（六二〇）七月壬戌、李世民率いる唐軍が洛陽に拠る王世充への攻撃を開始したことを指す。

【建瓴】 瓶中の水を覆す。転じて、高所より低所に向かっていて阻止しがたい形勢。『史記』高祖本紀。

【車書】 国家の文物制度を指す。『礼記』中庸「今天下車同軌、書同文。」

【北據崇芒、南屯伊闕】 唐の東征軍が洛陽を包囲したことを指す。

【雲羅】 敵を包囲した軍隊の比喩。『宋書』卷八四・鄧琬伝。

【妄作玄圭之瑞、窃号夏王】 『旧唐書』卷五四・竇建徳伝「武徳元年冬至日、於金城宮設会、有五大鳥降于樂寿、群鳥数万従之、經日而去、因改年為五鳳。有宗城人献玄圭一枚、景城丞孔徳紹

曰『昔夏禹膺籙、天錫玄珪。今瑞与禹同、宜称夏国。』建徳従之。」

【驅扇黒山之旅】 黒山は衛州衛県にあり（『元和郡県図志』卷一六）。後漢末に張燕が河北において結成し、のち公孫瓚の傘下に入った軍の名でもある（『三国志』卷八・張燕伝）。ここでは竇建徳が梁子都や突厥軍を傘下に収めて南下したことを指すか。

【□□許之人徒、收亡隨之文物】 不明部分は『全唐文』では「即傾」に作るが、文意が通らないのでそのままとする。武徳二年四月、煬帝を殺した宇文化及の軍を博州聊城県に破り、先后等を保護したことを照応。『旧唐書』卷五四・竇建徳伝。

【済岱】 済水と泰山。河南・山東地方を指す。

【荐食徐兗】 竇建徳は徐・兗兩州を陥しているわけではないので、ここでは広く河南地方を指すと思われる。

【惟茲勦寇、同惡相求】 王世充と竇建徳が唐に対抗して同盟したのは武徳三年十一月。

【溯流而上、奄至滎陽】 寶建德が滎陽を陥したのは武德四年(六二一)三月。

【首足互資、実同夏屋之獸】 夏屋山(代州にあり)に住むとされる「獸」という名の獸。蛭蛭・距虚という獸のために草を採ってやり、その代わり危機が迫ったら両者に背負ってもらって逃げるといふ。『爾雅』积地、『呂氏春秋』慎大覽・不広、『淮南子』道応訓、『說苑』復恩。

【前後迭至、冀效常山之蛇】 『孫子』九地篇「率然者、常山之蛇也。擊首則尾応、擊尾則首応、擊中則首尾俱応。」「晋書」卷九八・桓温伝「諸葛造八陣図于魚腹平沙上、温見之曰、此常山蛇勢也。」

【引塵北制、移蹕東虞】 武德四年三月癸未、李世民が寶建德軍を迎撃すべく虎牢に軍を移したことを指す。制は春秋時代、河南汜水の西にあった邑の名。また東虞は虎牢の異称。

【天策頻加】 李世民が戦後(武德四年一〇月)に天策上将とされたことを意識した表現か。

【鑿齒】 羿に寿華の野で射殺された怪物。『山海経』海外南経。

【窺窺】 少咸山に住む怪獸。牛身人面馬足で人を食うという。『山海経』北山経。

【発自板渚、迄于茲地】 板渚は寶建德が陣を構えたところ。汜水界の東三千里。寶建德は武德四年五月に板渚を発し、虎牢の手前で両軍会戦した。

【獷狻】 勇猛なさま。『文選』卷五・左思・呉都賦。

【陸梁】 猖獗横行する。『後漢書』皇甫規伝。

【陽景】 太陽。曹植・情詩。

【爰勅六軍】 勅は皇帝の命令、六軍は禁軍だが、本碑建立時には李世民は今上皇帝となっていたので、ここでは「秦王李世民が」「唐の東征各軍に」出動を命じた、という意味であろう。

【飛廉】 風神。『楚辭』離騷「前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬。」(王逸注「飛廉、風白也。」)

【翊衡】 『文選』卷二〇・曹植・応詔詩「流風翼衡、輕雲承蓋。」

【豐隆】 雷神。『楚辭』離騷「吾令豐隆奔雲兮、求宓后之所在。」

【禽茲元惡】 武德四年五月、寶建德を捕えたことを指す。

【仍執醜虜】 同月、洛陽を陥し、王世充を捕えたことを指す。

【列代神靈莫不畢収、前王彝器此焉総獲】 武德四年五月、唐軍が洛陽に入って、前代の宝物や図籍類を接收したことを指す。

【散馬華陽】 平和が訪れたことを指す。『書』武成「惟一月壬辰、越翼日癸巳、王朝步自周、于征伐商。厥四月哉生明、王来自商、至于豊。乃偃武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。」

【飲至】 会盟の後、宗廟に報告すること。『左伝』隠公五年、桓公二年。

【三川】 三河とは黄河・洛水・伊水。洛陽付近を指す。『文選』卷二七・顔延之・北使洛・(韋昭注)。

【漢王力競、屢見屈於城皐】 城皐＝成皐。『通鑑』卷一八〇・隋大業元年三月条「東至城皐。(胡注「隋志、鄭州滎陽界旧置成皐

郡。』同地において劉邦は項羽に包囲されたが、陳平の計略を以て項羽と范増を離間させることで危地を脱した。

【魏武爭雄、久連兵於官渡】曹操が袁紹を破った場所。鄭州中牟県の北一二里。

## V 唐の天下統一

### 〔訓読〕

夫の海外に載<sup>の</sup>うこと有り、宇内に虞無きに及び、玉帛を執りて以て朝に臨み、衣裳を垂れて治を班つ。玳符は雜沓し、繁祉は網緼し、甘雨薫風、時和らぎて載稔る。簫韶の楽を正すこと、止だに咸・英のみにあらずして、郊雍の靈を定むること、豈に唯に俎豆のみならんや。跛行も喙息も、跖実も排虚も、邇陬は原に遊び、遐闊は末に泳ぐ。攫拏は嘴距の用を忘れ、夷狄は冠帯の倫を斉しうす。外戸は常に開き、内機は作らず。含靈を仁寿に賓き、品庶を陶甄に変ず。

### 〔語釈〕

【網緼】天地陰陽の気が入り交じっている様。『易』繫辭下「天地網緼、万物化醇、男女構精、万物化生。」

【正簫韶之樂、非止咸英】簫韶は舜の楽名。『書』益稷「簫韶九成、鳳皇來儀。」また咸英は咸池（堯の楽）と六英（帝嚳の楽）の併称。のち古楽の汎称。『文心雕龍』楽府「自咸・英以降、亦無得而論矣。」つまり「黄帝の楽を堯が正して咸池を作り、顓頊の楽を嚳が正して六英を作った」故事を踏まえる。

【跛行喙息】様々な動物。『史記』匈奴伝。

【跖実排虚】跖実は地を走る獸、排虚は空を飛ぶ鳥。『淮南子』原道訓。

【邇陬游原、遐闊泳沫】『史記』司馬相如伝「邇陬游原、遐闊泳沫。（集解所引『漢書音義』…邇、近。原、本也。迴、遠。闊、

広也。泳、浮也。恩德比之於水、近者游其原、遠者浮其沫。）」

【攫拏】つかむこと。転じて猛禽、夷狄を指す。『文選』卷一一・王延寿・魯靈光殿賦。

【嘴距】嘴と爪。武力の比喩。『文選』卷三・張衡・東京賦「秦政利觜長矩、終得擅場。」

【内機不作】『文選』卷一四・江淹・雜体詩・許徵君「張子闔内機、單生蔽外像。」これは『莊子』達生篇の故事を踏まえる。

## VI 等慈寺建設・景觀描写

## 〔訓読〕

舟航を広めんと思ひて、幽顯を隔つること無し。官首の或いは節を握りて以て忠に殉ずるを静言<sup>おも</sup>い、行間の輪に埋もれて野に棄てらるる有るを追悼す。疏属の罪、方に迷塗に滞るを愍れみ、刑夭（刑天）の魂、久しく長夜に淪むを念う。苦累を拔除するは、必ず勝因に藉り、善根を増益するは、寔に浄土に資<sup>よ</sup>ると以爲い、乃ち命じて敵に克つの処に、普ねく道場を建てしめ、情は彼我を均しうし、恩は同異に洽くす。爰に此の寺を立て、等慈と号せしむ。境は實に鄭州、県は汜水と称す。班倕は既に集まりて、矩矱は斯に備わり、式て宝坊を構えて、茲の靈塔を樹つ。飛梁は虹のごと指し、浮柱は星のごと懸かり、層閣は崢嶸たりて、脩廊は黼黻たり。朝雲は暫く起こりて、華礎に津を流し、曉露は微かに霑いて、雕盤に漚<sup>したた</sup>を洳らす。茹蘆は阪に在りて、化して瞻蔔の林と爲り、熠燿は宵に行きて、摩尼の彩に翻暎す。傍らに奈苑を開き、淨花を敷きて韓曄たり、却<sup>ひ</sup>えには蓮池を帯び、定水を積みて澄湛たり。衣を結びて萃<sup>あつま</sup>り、錫を振いて来儀す。戒品は齊しく芳しく、禪枝は並びに茂んなり。其の地、則ち遙かに太室を瞻る。夏後の祥を発する所。近くに襄城を眺む。軒轅是に於いて道を訪ぬ。舳艫は控引し、金堤を循りて以て偁側し、冠蓋は往来し、玉門に趣きて隱軫たり。勢は爽塏に居り、物は衍沃と称さる。誠に原陸の膏腴にして、信に康莊の都会なり。豈に唯に致罰の野に、汚猪を免ぜらるるを獲、淫慝懲らす所に、其の京觀を赦さるのみならんや。

## 〔語釈〕

【思広舟航】 彼岸への橋渡しの比喩。

【静言】 思ひやる。『詩』衛風・氓「静言思之、躬自悼矣。」

【埋輪】 戦車の下敷きになって戦死する。『楚辞』九歌・国殇「霾

兩輪兮繫四馬、援玉枹兮擊鳴鼓。」

【疏属之罪】 『山海經』海外西經「貳負之臣曰危、危与貳負殺窶竄。帝乃梏之疏属之山、桎其右足、反縛兩手与髮、繫之山上木。」

【刑天之魂】 刑天＝刑天（形天）。北朝流の字体による（『潜研堂金石文跋尾』の考証を参照）。『山海経』海外西経「刑天与帝奪神、帝断其首、葬之於常羊之山。乃以乳為目、以臍為口、操干戚以舞。」

【乃命克敵之処普建道場】 貞觀三年閏一二月詔による。

【班倕】 古代の名匠、公輸班と倕。のち名匠名工の汎称。『後漢書』崔駰伝。

【矩矱】 法度。『楚辞』離騷「日勉升降以上下兮、求之矩矱所同。（王逸注…矩、法也。矱、…度也。）」ここでは文字とおり物差し、転じて「宮大工」の意。

【崢嶸】 『文選』卷一・班固・西都賦「於是靈草冬榮、神木叢生、巖峻崢嶸、金石崢嶸。」

【黼黻】 黒いさま。『文選』卷一一・何晏・景福殿賦「縣黼黻、隨雲融泄。（李善注…黼黻、黒貌。）」

【雕盤法渢】 『全唐文』は「雕」を「夕」に作るが、『書跡名品叢刊』第一三五冊「唐顏師古等慈寺碑」（二玄社、一九六九）の釈文、および『文苑英華』卷三五一・梁昭明太子・七契の「瑤俎既已麗奇、雕盤復為美玩。」を踏まえ、改める。

【茹蘆在阪】 茹蘆は茜草。赤色の染料。『詩』鄭風・東門之墀「東門之墀、茹蘆在阪。其室則邇、其人甚遠。」

【瞻蔔之林】 梵語 Candapaka の音訳。『維摩詰所説經』觀衆生品「如人入瞻蔔林、唯嗅瞻蔔、不嗅余香、如是若入此室、單聞仏功德之香、不樂聞声聞辟支仏功德香也。」（大一四・五四八上）

【奈苑】 「波羅奈（バーラナシー、ベナレス）の鹿野苑」のこと。後転じて寺院を一般的に指す。『維摩経』仏国品「一時仏遊於維耶離奈氏樹園、与大比丘衆俱。」（大一四・五一九上）、『法華玄義』卷一〇上「復次釈論、結集法藏、初從波羅奈、至泥洹夕、凡所説小乘法、結為三法藏、從初生至双樹、凡説大乘、結為摩訶衍藏、奈苑之前、不預小乘撰。」（大三三・八〇四上）

【定水】 清澄な水。禪定の心の比喩。『広弘明集』卷二〇・梁元帝・法華連璧序「薰戒香、沐定水。」（大五二・二四三中）

【萃止】 『詩』陳風・墓門「墓門有梅、有鴉萃止。」「止」は虚字

【戒品・禪枝】 「戒律も禪も」という意味。

【遙瞻太室、夏后之所發祥】 太室は嵩山。『国語』周語上「昔夏世記」「禹受封為夏伯、在予州外方之南、今河南陽翟是也。」

【近眺襄城、軒轅於是訪道】 襄城縣は汝州にあり。『莊子』徐无鬼「黄帝将見大隗乎具茨之山、…至於襄城之野、七聖皆迷、无所問塗（成玄英疏…今汝州有襄城縣、在秦隗山南、即黄帝訪道之所也）。適遇牧馬童子、問塗焉。」

【金隄】 黄河に造られた堤防の名。鄭州より河口まで連なっていた。『元和郡県図志』卷八・鄭州滎沢縣の項「金隄、縣西北二十里。漢文帝時河決酸棗、潰金隄、東郡大興卒塞之。…至明帝永平十二年、詔樂浪人王景築隄、起自滎陽、東至千乘海口千余里。十里立一水門、更相迴注、無復潰漏之患。此隄首也。」

【偏側】 また偏仄。ここでは大運河・黄河・洛水の結節点に当た

る等慈寺周辺の漕運船団のにぎわいを形容。

【玉門】 成皋城の北門。劉邦が成皋で項羽に包囲されたとき、そこから脱出した。『史記』高祖本紀「漢王跳、独与滕公共車出成皋玉門（集解…徐広曰、項羽紀云北門名玉門。）」、北渡河、馳宿脩武。」

【爽塏】 『左伝』昭公三年春「子之宅近市、湫隘囂塵、不可以居、請更諸爽塏者。（杜注…爽、明。塏、燥。）」

【原陸】 大地、原野。『文選』卷三・張衡・東京賦「乘輿巡乎岱嶽、勍稼稿於原陸。」

【康莊】 四通八達の所。『爾雅』釈宮「五達謂之康、六達謂之莊。」  
【獲免汚瀦】 汚瀦。刑罰の一種。三国魏の賊律に見える。『晋書』刑法志「其後天子又下詔改定刑制、…又改賊律、…至於謀反大逆、臨時捕之、或汚瀦、或梟洎、夷其三族、不在律令、所以嚴絶惡跡也。」

【淫慝所懲】 『左伝』宣公一二年六月「古者明王伐不敬、取其鯨鯢而封之、以為大戮、於是乎有京觀、以懲淫慝。」

【赦其京觀】 『左伝』宣公一二年六月「君盍築武軍、而收秦尸以爲京觀。（杜注…積尸封土其上、謂之京觀。）」

## VII 太宗の治世の称揚

### 【訓読】

乃ち深く縁起に入りて、永えに蓋纏より離れしめ、普ねく法財に頼りて、同に妙楽に帰せしむ。悠悠たる曠劫は、慧力の偏る靡きに憑り、疊疊たる恒沙は、福聚の尽くる無きが譬し。南山の寿は、既に弥い億年より茂んにして、北極の尊は、実に万代を牢籠す。窃かに惟えらく望雲就日、博貫多能にして、理は寰中に極まり、道は繫本に臻る。篆籀を考覈して、流略を偏詳し、儒墨の短長を定めて、刑名の苛繞を棄つ。織微は必ず挙げ、幽蹟は斯に応じて、其の隱奥に通る能わず、其の舛響に潜む所無し。五老は変じて流星と為りて、懸かに象緯を識り、八靈は積雪に符して、曲さに物名を尽くす。晨に食して勞を忘れ、味旦丕いに顯わる。尚お巖穴を想いて、博く芻蕘に逮ぶは、俱に滿堂の歆を幸いて、猶お納隍の慮を興す。愛は祝網を踰えて、仁は扇喝を兼ね、玄覽を降して游芸し、人文を觀て以て化成る。齊梁の短篇を賤しみて、苦寒の危調を鄙しむ。転規注河の論は、聴く者神を開き、芝英垂露の書は、觀る者目を眩ます。飛蜩の妙

術、抑咒の神工もて、律呂の輕重を制し、草木の情状を知す。郁として煥として、記すべき弗きのみ。重明は徳を養い、器を守りて匕鬯に光き、璇枝は善を楽い、固と作りて維城に列ぬ。威儀は抑抑たりて、良翰は赳赳たり。文士は金錫の姿を纏めて、武臣は熊羆の状を表す。田を耕し井を鑿ちて、賜を受くると雖も跡無く、壤を撃ち腹を鼓ちて、諒に日ごとに用うるも知らず。百年して然る後に残に勝つとは、仲尼の言、斯くも闕し。三脊の茅致し難しとは、夷吾の志す所、小爲り。蓋し夫の植操の恒久ならしむるは、金石より貞なるは莫し。盛徳の形容は、聿に歌頌に宜ぶ。末臣庸謏なるも、鴻猷を奉ずるに預かり、短才を罄すと雖も、未だ休烈を揚げず。其の詞に曰く、

〔語釈〕

【蓋纏】 五蓋と十纏。煩惱の数。『維摩詰所説經』 仏国品「悉已

清淨、永離蓋纏。」(大一四・五三七上)

【曠劫】 極めて長い時間を過去に向けては曠劫、未来に向かつては永劫という。

【亶亶】 水の流れる様。『文選』 卷五・左思・呉都賦「玄蔭耽耽、清流亶亶。」

【福聚】 福聚海。『觀音經』。

【南山之寿】 祝寿の言葉。『詩』 小雅・天保「如南山之寿、不騫不崩。(孔疏…天定其基業長久、且又堅固、如南山之寿。)」

【北極之尊】 帝王を指す。『晋書』 卷一一・天文志上。

【牢籠】 全てをひとまとめにする。『淮南子』 本經訓。

【望雲就日】 臣下が君主を崇仰して従うさま。『史記』 五帝本紀「帝堯者、放勳、其仁如天、其知如神。就之如日、望之如雲。」

【傳貫】 『後漢書』 班固伝「年九歲、能属文、誦詩賦、及長、遂

博貫載籍。」

【篆籀】 篆書と籀書。『文選』 卷六・左思・魏都賦「隸校篆籀、篇章畢覩。」

【流略】 九流・七略の書。前代の書籍。『梁書』 卷八・蕭統伝所引・王筠・昭明太子哀冊文「括囊流略、包孕芸文。」

【儒墨】 儒家と墨家。『莊子』 天運「天下大駭、儒墨皆起。」

【刑名】 申不害等、法家系の学派。『史記』 老子韓非伝「申子之学、本於黄老、而主刑名。」

【昏昏】 散漫なさま、不明瞭な状態。昏昏・昏昏(響に作るは仮借。『萃編』 按語を参照)。『晋書』 卷六〇・索靖伝。

【五老變為流星】 『竹書紀年』 上・帝堯七〇年「洪水既平、焞功於舜、將以天下禪之、…率舜等升首山、遵河渚、有五老游焉、蓋五星之精也。相謂曰、河圖將來、告帝以期、知我者重瞳黃姚。五老因飛為流星、上入昴。」

【味旦丕顯】早起きして務める。『左伝』昭公三年春、張衡・東京賦。

【博達芻蕘】『詩』大雅・板「先民有言、詢于芻蕘。(毛伝・芻蕘、薪采者。)」

【納隍之慮】人々の苦しみに対する心配。『孟子』万章下、『文選』卷三・張衡・東京賦。

【祝網】帝王の仁政。『史記』殷本紀。

【扇暍】扇で熱射病の人をあおぐ。徳政の比喩。『淮南子』人間訓。

【觀人文以化成】『易』賁「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下。」

【賤齊梁之短篇、鄙苦寒之危調】適例未詳。全体として南朝文化の批判。

【転規注河之論】転規は阻害する物のないさま。注河は次二例の「涌泉」「投水」と対応か。『後漢書』馬援伝「謀如涌泉、執如転規。(李賢注・規、員也。)」、『文選』卷五六・陸倕・右闕銘「尊敵之度、不傷於師旅、淵默之容、無改於行陣。計如投水、思若転規。」

# VIII 詞

## 〔訓読〕

肇め元極自り、初めて太清を分かつ。二儀位を定めて、四大貞に居る。緬かに遂古を求めて、遯く遐声を聴く。質文通

【芝英垂露之書】芝英・垂露ともに書体名。『封氏聞見記』文字

「南齊蕭子良撰古文之書五十二種、鵠頭・蚊脚・懸針・垂露・龍爪・仙人・芝英……之属、皆狀其体勢而為之名。」を参照。

【重明】光明を継ぎ伝える。太子・儲君を指す。『易』離。

【匕鬯】『易』震「震驚百里、不喪匕鬯。(王弼注・匕、所以載鼎実。鬯、香酒。奉宗廟之盛也。)」

【璇枝】皇族の子孫。『芸文類聚』卷七六・梁簡文帝・慈覺寺碑。

【維城】城を連ねて国を守る。また皇子・皇族を指す。『詩』大雅・板。

【擊壤鼓腹】太平盛世の様。晋皇甫謐『帝王世紀』「帝堯之世」天下大和、百姓無事、有五十老人擊壤於道。觀者歎曰『大哉、帝王之徳也。』老人曰『吾日出而作、日入而息、擊井而飲、耕田而食。帝何力於我哉。』(『芸文類聚』卷一一所引)

【百年然後勝殘】『論語』子路「善人為邦百年、亦可以勝殘去殺矣。(何晏集解・王曰、勝殘、殘暴之人使不為惡也。)」

【三脊之茅難致】「三脊之茅」は、斉桓公の封禪強行を諷めようとした管仲(夷吾)が実施要件として挙げた諸々の瑞兆の一つ。

『史記』封禪書「江淮之間、一茅三脊、所以為籍也。」

に變じて、粹駁名を殊にす(その一)。季業紛詭にして、政は荒れて道は喪わる。鹿を逐い駈を争いて、龍に乗りて亢<sup>たか</sup>ぶること有り。亟<sup>い</sup>しば不造に罹<sup>ひ</sup>いて、時に无妄に逢<sup>あ</sup>う。至治は興る莫<sup>な</sup>くして、嘉生は暢<sup>みだ</sup>ぶる靡<sup>みだ</sup>し(その二)。滔德は既に厭<sup>いと</sup>み、炎運は將に徂<sup>そ</sup>かんとす。鴻は野に飛びて満ち、狼は朝に入りて燕<sup>みだ</sup>る。緑林は叛換して、青犢は睢盱<sup>みだ</sup>す。中外板蕩して、億兆命胥<sup>みだ</sup>す(その三)。聖帝期を膺<sup>あ</sup>けて、彼の顛覆を懸<sup>けん</sup>れむ。始めて天柱を建てて、初めて地軸を安んず。方難は畢<sup>み</sup>く夷<sup>ひ</sup>げられて、群凶は尽<sup>じん</sup>く戮<sup>りく</sup>さる。芒芒たる率土は、俱に亭育を荷<sup>か</sup>う(その四)。寿華に霧社して、用て国歩を康<sup>か</sup>んず。陽紆<sup>やう</sup>に懸<sup>けん</sup>を斃<sup>め</sup>して、実に王土を清めたり。牧野も艱<sup>かん</sup>にあら<sup>な</sup>ずして、鳴条も豈<sup>いかで</sup>に固<sup>か</sup>からんや。勢は蹙<sup>しやく</sup>の卷<sup>ま</sup>かるるを蹙<sup>しやく</sup>え、俯<sup>ふ</sup>すること榮<sup>えい</sup>の注<sup>しゆ</sup>ぐに同<sup>どう</sup>じ(その五)。魔衆既に摧<sup>さい</sup>かれて、勝幡斯<sup>し</sup>に立つ。茲<sup>こゝ</sup>の罪垢<sup>ざいこう</sup>を釈<sup>しやく</sup>して、幽執<sup>ゆうしやく</sup>を伸<sup>の</sup>べしむ。施<sup>せ</sup>すに無畏<sup>むゐ</sup>を以<sup>も</sup>てして、其の余習<sup>よしゆ</sup>を断<sup>た</sup>つ。此の戎墟<sup>じゆうきょ</sup>に即<sup>す</sup>きて、招提<sup>しやうだい</sup>の葺<sup>き</sup>く攸<sup>き</sup>なり(その六)。雲楼<sup>うんろう</sup>は赫<sup>こく</sup>燁<sup>えつ</sup>として、月殿<sup>げつてん</sup>は玲<sup>れい</sup>瓏<sup>たう</sup>たり。冬に愛景<sup>あいけい</sup>を延<sup>の</sup>きて、夏に清風<sup>せいふう</sup>を納<sup>な</sup>む。白頰<sup>はくけつ</sup>は齊<sup>さい</sup>しく業<sup>さか</sup>んにして、丹桂<sup>たんけい</sup>は叢<sup>そう</sup>を連<sup>れん</sup>ぬ。綺疏<sup>きそ</sup>は瞰<sup>かん</sup>迴<sup>かい</sup>して、繡桷<sup>しうこく</sup>は空<sup>くう</sup>を凌<sup>りやう</sup>ぐ(その七)。金繩<sup>きんじゆ</sup>は光<sup>くわう</sup>を吐<sup>は</sup>きて、宝鈴<sup>ほうりやう</sup>は響<sup>きやう</sup>きに和<sup>わ</sup>す。香<sup>かう</sup>は梵音<sup>ぼんおん</sup>を繞<sup>りやう</sup>らして、花<sup>はな</sup>は仙掌<sup>せんしやう</sup>に飛<sup>と</sup>ぶ。妙相<sup>めうしやう</sup>は凝寂<sup>ねいじやく</sup>として、真容<sup>しんぐう</sup>は煥朗<sup>くわんらう</sup>たり。開士<sup>かいし</sup>は心を宅<sup>たく</sup>きて、伊蒲<sup>いぶ</sup>は瞻仰<sup>せんおん</sup>す(その八)。崇巖<sup>しゆがん</sup>は秀峙<sup>しゆし</sup>して、迅流<sup>しゆんりゆう</sup>は長邁<sup>ちやうまい</sup>す。石城<sup>せきじやう</sup>は矚<sup>しやく</sup>を迴<sup>かい</sup>りて、龍池<sup>りゆうち</sup>は界<sup>かい</sup>を斜<sup>しゃ</sup>めにす。左は敖<sup>お</sup>・碣<sup>けつ</sup>を顧<sup>こ</sup>みて、右は汜<sup>ひ</sup>鄒<sup>そう</sup>に通<sup>と</sup>ず。寔<sup>じつ</sup>に惟<sup>ただ</sup>れ勝境<sup>しやうけい</sup>にして、誕<sup>おと</sup>いに靈怪<sup>りやうかい</sup>を標<sup>ひょう</sup>す(その九)。至人<sup>しにん</sup>の恵利<sup>ゑり</sup>、正覺<sup>しやうかく</sup>の津梁<sup>しんりやう</sup>は、偕<sup>い</sup>に万善<sup>まんぜん</sup>に登<sup>のぼ</sup>して、普<sup>ふ</sup>ねく十方<sup>じふしやう</sup>を照<sup>しやう</sup>らす。深慈<sup>しんじ</sup>は広博<sup>くわうはく</sup>にして、冥慶<sup>めいけい</sup>は遐長<sup>げいちやう</sup>たり。式<sup>しき</sup>て光<sup>くわう</sup>かすこと替<sup>か</sup>わる勿<sup>な</sup>くして、永<sup>えい</sup>えに播<sup>は</sup>くこと疆<sup>きやう</sup>無<sup>な</sup>し。

通議大夫・行秘書少監・輕車都尉・琅邪郡開國子、臣顏師古、奉勅撰

〔語釈〕

【二儀】 天地、または日月。曹植『子建集』卷六・惟漢行、『芸

文類聚』卷一四・陳沈炯・陳武帝哀策文。

【四大】 仏教では地・水・火・風を、道家は道・天・地・人を四

大とする。

【乘龍有亢】 『易』乾・文言伝「上九曰、亢龍有悔、何謂哉。子

曰、貴而无位、高而无民、賢人在下位而无輔。是以動而有悔也。」

【不造】不幸。『詩』周頌・閔予小子「閔予小子、遭家不造。」  
 【无妄】『易』无妄「无妄、元亨利貞。其匪正有眚。不利有攸往。」  
 【炎運將徂】隋は火徳、唐は土徳とされる。『冊府元龜』卷一・帝王部・總序「隋文受禪、次用火徳、…唐氏承統、盛徳在土。」を参照。

【緑林・青犢】いずれも前漢末の反乱勢力のひとつ。  
 【睚眦】見上げたり目を見張ったりするさま。『文選』卷二・張衡・西京賦「迺卒清候、武士赫怒、緹衣韎韐、睚眦跋扈。」

【板蕩】板・蕩は『詩』大雅の篇名。世の乱れたさまを言う。

【方難】各地の戦禍を指すか。

【亭育】養育。『梁書』武帝紀下「思隨乾覆、布茲亭育。」

【壽華】羿が鑿齒を破った場所。↓十四頁【鑿齒】の項。

【憂社】犠牲を殺し血を取って社神を祭る。『管子』小問「桓公踐位、令憂社塞禱。」

【陽紆斃惡】陽紆は正しくは楊紆。古の沢薺の名。西周穆王が西征の過程で通過している。『穆天子伝』卷一。

【牧野】周武王と殷紂王が戦ったところ。

【鳴条】殷湯王と夏桀王が戦ったところ。『書』湯誓序。

【籀卷】後世の用例に『文苑英華』卷一八七・席夔・竹箭有筠詩「可憐初籀卷、粉沢更宜新。」、同三二五・朱放・竹詩「籀卷初呈粉、苔侵乱上銭。」(何れも中唐の人)等あり。

【幽執】収禁すること。『漢書』五行志下之上「劉向以為龍貴象而困於庶人井中、象諸侯將有幽執之禍。」

【無畏】仏が大衆の中で法を説くに、泰然として畏れることがないさま。

【招提】四方の人、修行僧。ここでは寺の建物を指す。

【開士】菩薩の異名。

【宅心】『書』康誥「汝丕遠惟商耆成人、宅心知訓。(孔疏…又当須大遠求商家耆老成人之道、居之於心、即知訓民矣。)」

【伊蒲】優婆塞。『後漢書』楚王英伝「其還贖、以助伊蒲塞桑門之盛饌。(李賢注…伊蒲塞、即優婆塞也。)」

【左顧敖闕】敖山・郛山を指すか。何れも鄭州管城県の西一五里にあり。『元和郡県図志』卷八。

【右通汜鄆】汜は汜水。鄆は西周の邑「祭」か。『説文』邑部「鄆、周邑也。」、『元和郡県図志』卷八・鄭州管城県の項「祭城、県東北一十五里。」あるいは汜水の「際」か。

【通議大夫】文散官。正四品下。

【秘書少監】職事官。従四品上。通議大夫との関係から「行」が付く。

【輕車都尉】勳。正七品下。

【琅邪県開国子】爵。正五品上。

## 二 道德寺故大禪師大法師之碑

### 〔解題〕

本碑は一九五〇年に陝西省西安市西郊の梁家荘で出土し、現在、西安の碑林に保存される。内容は隋の大業年間に創建された尼寺道德寺の沿革であり、三人の尼僧、善恵・玄懿・十善の事績から成り、特に道德寺の創建に関わった前二者の顕彰を目的として、十善の発願のもとに建てられたものである。

北周武帝の廃仏を経て、隋の仏教復興政策の中で朝廷に迎えられた善恵は、文帝の泰山行幸に随行するほど、朝廷において重きをなす。二代皇帝煬帝の時代になっても変わらず厚遇され、玄懿と共に元徳太子の戒師を務めた。その後、功績により長安の弘徳坊に道德道場を授けられる。煬帝の頃、坊は里と称されたため、碑文中には弘徳里とある。これが道德寺のおこりであり、唐にもそれが継承され、善恵・玄懿の後をうけ、十善が寺主となる。二代皇帝太宗の没後、弘徳坊の道德寺の地を別廟宗正宮（崇聖宮）としたため、道德寺は休祥坊の地に移ることになる。

以上が本碑の大まかな内容であるが、隋・唐初期の国家と仏教との関係において尼寺が重要な役割を果たしたことを示す貴重な史料で、本碑によって『長安志』などに見られる道德寺に関する記述を補い訂正することができる。但し、事実関係や繫年の誤りが散見されるので、扱いには注意が必要である。本碑の撰せられたのは碑文中にも見える顕慶三年（六五八）であろう。撰者については未詳である。

本碑に関しては、長らく研究が無かったため、本研究班所蔵の拓本をもとに訳注者が釈文を作成し、研究班の席上、それをもとに解説を行い修正を加えた。その後『碑林集刊』第五（一九九九）に樊波氏の「『唐道德寺碑』考述」が掲載さ

れ、全文の釈文と内容に関する若干の考察がなされた。今回の訳注は、一部、それを参考にしたが、氏の解釈とは異なる部分もあり、基本的には訳注者の判断で作業を行った。また、『唐代史研究』第四号（平成十三年刊行予定）に道徳寺碑の内容に関する考察を含む論考を掲載予定であるので、併せて参照されたい。

（松浦典弘）

〔釋文〕

大唐京師道徳寺故大禪師大法師之碑

觀夫性海難航。六舟於焉整棹。迷衢易惑。三駕所以齊驪。故得艤截情風。澄心源之五浪。開蒙指要。統幽關於八道。自法王啓運。照臨下土。乘攝度之明略。成濟四生。布／歸敬之宏圖。陶鈞七衆。遂使住法千載。紹先聖之羽儀。宗匠萬齡。繼後賢之清軌。顧斯道也。曷不尙哉。若夫沐道依仁。開濟之途逾遠。酬恩顧德。終憂之及彌新。逮于化靜金／河。道流玉檢。時移顯晦。師資之道不忘。法被澆淳。弘護之□無絕。殷鑒西宇。則解綱於姨宗。施及東川。則紹隆於師襲。隨時開發。斯人在斯。大阿闍梨善惠禪師。俗姓張氏。／齊郡歷城人也。其先遠祖。出自南陽。隨官流寓。故又爲縣人焉。若乃載德英靈。冠諸油素。旣捐恆習。略而不敍。顯考昔任北齊兗州刺史。襄惟布政。明鑒若神。釋滯來蘇。時／惟革俗。禪師體悟虛宗。振清規於緇櫛。玄識拔俗。標雅重於髫年。信重玄風。高尚正法。以東魏武定之初。便蒙落采。卽住本州清戒寺。驛智問津。解形骸於塵大。馳情徇道。／分色心於生滅。故能疎略觀道。條暢禪林。載歷炎涼。庵成鴻業。暨齊錄失御。周統海濱。陳王宇文純作牧本州。廣詢名理。禪師德招高譽。道俗欽崇。頻請在筵。遐討幽□。建／德三年歲惟甲午。周國寺觀。咸屏除之。預有僧尼。竝歸榮梓。禪師當斯百六。纔過十夏。慨茲塗炭。何日可忘。銜恤俗流。戒行逾肅。屬隨文創曆。佛日載揚。所在伽藍。一期還／復。追召前法。重處緇流。然以名稱普聞。率先賞會。因循舊業。綜括尤深。漆木未之疇。箇直何能擬。固得道聲攸被。遐邇宅心。弘贊規猷。光臨上國。開皇十年。下勅徵召。於是／卸駟載馳。蒲輪累轍。旣達京闕。啓沃帝心。陳上天之五相。明下聖之十善。乾坤迺久。終淪陷於非常。神理雖玄。畢剋繕而無朽。天

子欣然。無爽弘喻。召入紫宸。扇貞明於四／后。重居黃屋。布雲雨於六宮。乃知權道三謀。無緣於隱顯。隨機九變。不滯於容光。從事以倫。固其宜矣。開皇十二年。混一四海。捻溺百王。車駕東巡。登封泰嶽。禪師同諸宮／例。俱來齊境。創達鄉縣。載動俗心。懽慶相高。名望彌穆。又下勅爲立新寺。賜號天華。仍以居之。用隆榮顯之禮也。至十五年。隨駕入京。逾崇欽重。及後乖忤。請出宮闈。中使／流問。相望馳道。既而奔逼四山。命摧三相。自識化期。累□明允。以大業六年十一月一日。終於本房。春秋七十有五。嗚呼哀哉。初現疾彌留。晤言無味。及其終夕。洞發神光。／道俗雲蒸。敬歎烟合。又感音樂。不委何來。繁會滿空。遠近通委。

有玄懿法師。卽第二阿闍梨也。俗姓展氏。同住齊州。生緣所天。任東魏徐州長史。闍梨幼挺幾神。生知辯慧。／年甫八歲。景則四依。尋預解髮。欽崇嚴檢。履操清白。厲絮於冰霜。凝度沖深。重伋於牆宇。周聽玄理。備酌幽求。言問重隱。探索玄極。至於開權顯實之略。鳴謙攝度之功。前／脩昧於斷常。後銳昏於得離。莫不條緒本幹。啓案筌蹄。是以地論法華。鏡其林苑。澄坐引決。契洽衆心。四俗知歸。有類華陰之市。七貴請謁。如臨稷下之門。是知蓮華闍梨。／不獨舍衛之宮。寔乃行萬安隱。道振離車之邑。然以德爲物宗。神王清遠。珪璋內映。琴瑟外和。與惠禪師。生平久要。義光法光。□采而□映。上流□流。沿沂而俱洽。齊聲同／召。遠赴綸言。門徒十餘。俱來戾止。留連枰掖。高賞德音。供錫駢羅。珍味填積。前後奏度僧三百餘。禮異恆條。將及萬計。皆營福利。廣事莊嚴。于時歲聿云暮。蒲柳可悲。頻請／陵謝。終不蒙許。迄於仁壽。鎮處禁中。昭明正範。啓喻緣業。

會文祖晏駕。煬帝臨朝。恭承厚德。彌隆前務。元德太子作貳春坊。搜選賢能。恢張儀則。大業九年。有詔。令二闍梨／爲太子戒師。遂卽延入承明。稟資歸護。居諸屢積。祈告莫因。掩以天網。不遑寧處。沈憂變景。視聽兩宮。乃下勅於京邑弘德里。爲立道德道場。所有門人。竝聽出住。四事／供給。一從天府。於是復殿重敞。暢象設之光華。簪廡高袤。顯衆侶之榮采。加以制度嚴絜。儀範肅彰。預有儕流仰之成則。且夫生也有涯。怛化懷新新之變。心乎不滅。／傳火啓念念之徵。天不憖遺。相從物故。以大業十一年八月一日。終於本寺。春秋七十有四。惟此二師。言爲行範。克莊十念。無惑

九思。達上古之衣薪。通季代之棚塼。迺行／林葬於終南山焉。喪事所資。竝歸官給。贈贈之重。榮哀通備。

大唐顯慶三年。道德寺主十善律師。即前法師之外甥也。俗姓王氏。俗本太原。大父往任北齊青州長史。因官／東夏。遂家于齊。隨祖開法。廣度僧尼。時年七歲。預霑法伍。還依姨氏。資爲師傳。三業憑准。六事規猷。後移京輦。又處親侍。俯仰疏勵。敬愛逾隆。具戒已後。專業律科。條節憲／章。規誠清衆。致使法海絕青田之穢。士林虧白首之□。屢登寺任。細維正綱。仰惟懽喜重請。減法半千。善見懲揚。□途莫二。慨茲成教。佩結深衷。是以攝檢四儀。宗猷八敬。／繩持念慧。步仰英蹤。固知金甌開教。寧在羅衛宮中。蒙塵祈度。何止祇洹門外。卽斯後嗣不屑前良。原夫至人之布化也。妙以出有爲言先。舉其大綱畢。用學依爲行本。豈／□□□品。惟聖之良基。如說脩行。道賢之明約。道不孤運。故使三號冠於三師。人能弘道。是則三業備於三學。可謂一時准的。萬葉舟航。不可□也。

律師永惟鞠育之重／□。格於穹旻。慈□之□恩。隆於屹岵。誠知德高不賞。非賞可以酬勞。惠深不謝。非謝而能通理。日月逾遠。風支之恨莫追。容景鎖亡。梁摧之慟何及。重□年將八十。四選交／臨。崦嵫之想旣懸。松檟之悲彌切。將恐芳猷寂漠。超終古而不聞。高行漸離。咨後葉而誰紀。所以投誠有寄。樹此豐碑。將使田海互遷。紹芳規而靡絕。神□交運。統敬愛／而無遺。方於碑之□面。圖佛靈儀。庶得福履綏之。津梁往識。又於碑之後面。刊像二師。列位資輔。用陳昭穆。初以 太宗升遐天經。京立□於弘德坊。寺置宗正宮。尼衆北／移在休祥里。卽今之道德寺是也。事涉前後。恐有遲疑。敢具昭揚。相無昏沒。序而巳。頌以亂之。其詞曰。／

□□終古。浩然太素。神理茫昧。誰其津渡。於惟至覺。肇開明悟。□律三章。披圖八務。十部周衛。五衆來儀。古今化範。賢聖成規。激迪在慮。鎔裁致危。陶誘重請。深文遂馳。倬／矣大師。教開名色。道疎神解。慧清念力。彫琢性靈。昭章幽極。心期所漸。惟幾孔棘。□允宗貳。贊叶務成。經緯剖裂。辯據遐明。乘權□實。控綱持衡。蒸仍學□。貽其後生。有周／道喪。玄綱絕紐。惟隨建國。大通休各。重啟釋門。載揚仁壽。金表天臨。王堂殷阜。德延物議。聲采攸敷。徵歸玄圃。言謁黃圖。宮闈□化。見日幽都。高謝宸兩。識變旋途。綸言旣／被。道場斯立。置阜王城。崇衡天邑。棟宇

風翔。清徒鱗集。弘德昔構。休祥今葺。五福未窮。三靈或爽。嗟乎保傳。相從化往。白日雲昏。青山霧上。聲色寂遼。無因鑽仰。昔緣膜拜。／＼儻個空首。需尔宅心。恂□善誘。厚德未晞。埋名身後。霜露□感。於焉永久。銘之圖之。去矣無期。營魄安往。神道何息。仰景山而取則。寄貞石而陳詞。騰茂實於來際。顧風聲／＼之在茲。

吏部文林郎□範筆。

## I 序

### 〔訓読〕

観するに、夫れ性海航し難く、六舟焉に於いて棹を整え、迷衢惑い易く、三駕所以に驢を斉う。故に艤の情風を載ち、心源の五浪を澄ませ、蒙を開き要を指し、幽関を八道に統ぶるを得。法王運を開き、下土に照臨して自り、摂度の明略に乗じ、四生を成済し、帰敬の宏図を布き、七衆を陶鈞し、遂に法を千載に住め、先聖の羽儀を紹ぎ、万齡に宗匠たりて、後賢の清軌を継がしむ。斯の道を顧みるや、曷ぞ尚ばざらんや。若し夫れ道を沐するに仁に依らば、開済の途逾いよ遠く、恩に酬い徳を顧みれば、終憂の及ぶこと弥いよ新たなり、化静金河、道流玉檢に逮ぶ、時顕晦を移すも、師資の道忘れず、法滂淳を被つわも、弘護の□絶ゆる無し。西宇を殷鑒せば、則ち姨宗に解綱し、東川に施及せば、則ち師襲を紹隆す。時に随い問々発するは、斯の人斯に在り。

### 〔語釈〕

【性海】 真理の深く広いことを海に喩えたもの。『華嚴一乗教義  
齊章』卷一「初明建立一乗者、然此一条教義分齊、開為二門、  
一別教、二同教、初中二、一性海果分、是不可說義。(大四五・  
四七七上)」

【六舟】 六波羅蜜を舟に喩えたもの。『十住心論』卷六「百億心  
同泛六舟、千葉牟尼等授三駕。(大七七・三三七上)」

【三駕】 三乗。声聞乘(羊車)・緣覺乘(鹿車)・菩薩乘(牛車)。

【八道】 八正道。悟りに至る八つの道。正見・正思惟・正語・正

業・正命・正精進・正念・正定

義戒。(大三〇・五一上)

【七衆】比丘・比丘尼・式叉摩那・沙弥・沙弥尼・優婆塞・優婆夷。

【羽儀】『易』漸「鴻漸于陸、其羽可用為義。(孔穎達疏) 処高而能不位自累、則其羽可用為物之儀表、可貴可法也」

苾芻戒・苾芻尼戒・正学戒・勤策男戒・勤策女戒・近事男戒・近事女戒、如是七種、依止在家出家二分如応当知、是名菩薩律

【師資】師弟。『老子』「善人不善人師、不善人善人資。」

近事女戒、如是七種、依止在家出家二分如応当知、是名菩薩律

【殷鑑】『詩』大雅・蕩「殷鑑不遠、在夏后之世。」

## II 善恵①

### 【訓読】

大阿闍梨善恵禪師、俗姓張氏、齊郡歷城の人なり。其の先達の祖は、南陽に出自す。官に随い流寓す、故に又県人と為る。乃ち徳を英霊に載せ、諸々の油素に冠たるが若きは、既に恒習を捐て、略して叙せず。顯考 昔北齊の兗州刺史に任ぜられ、褻帷もて政を布き、明鑑なること神の如きにして、滞るを釈き来りて蘇えり、時に惟れ俗を革む。禪師虚宗を体悟し、清規を緇櫛に振い、玄識拔俗し、雅重を髫年に標し、信に玄風を重んじ、高く正法を尚ぶ。東魏武定の初を以て、便ち落采を蒙り、即ち本州清戒寺に住まる。駅智り津を問い、形骸を塵大に解き、馳情徇道、色心を生滅に分かつ。故に能く疎略にして道を観、禪林に条暢し、載に炎涼を歴、鴻業を庵成す。齊録失御し、周海浜を統ぶるに暨び、陳王宇文純本州に作牧し、広く名理を詢ぬ。禪師徳もて高誉を招き、道俗欽崇し、頻りに第に在らんことを請い、遐討幽□。建徳三年歳惟れ甲午、周国寺観、咸之を屏除し、預じめ僧尼有らば、並びに棄梓に帰す。禪師斯の百六に当たりては、纔かに十夏を過ぐるのみ。茲の塗炭を慨き、何の日か忘るべけんや。銜恤俗流、戒行逾いよ肅なり。

### 【語釈】

【齊郡歴城】現在の山東省。

【南陽】現在の河南省。

【兗州刺史】 兗州は現在の山東省。刺史は州の長官。

【襄帷】 官僚が人民に親しく接し、廉潔な政治を行うこと。『後漢書』賈琮伝

【来蘇】 『尚書』 仲虺之誥「東征西夷怨、南征北狄怨、曰奚独後

予。攸徂之民、室家相慶、俟予后、后来其蘇。（孔穎達疏）湯所往之民皆喜曰、待我君、来其可蘇息。」

【問津】 『論語』 微子「長沮・桀溺耦而耗。孔子過之、使子路問

津焉、長沮曰、夫執輿者為誰、子路曰、為孔丘、曰、是魯孔丘與、曰、是也、曰、是知津矣。」

【字文純】 字文泰の子。北周・武帝の異腹の兄弟にあたる。『周書』卷一三に伝有り。

【建德三年……】 北周・武帝の廃仏。西暦五七四年。

【銜恤】 『詩』小雅・蓼莪「無父何怙、無母何恃、出則銜恤、入則靡至。」

### III 善恵②

#### 〔訓読〕

属ま随文曆を創め、仏日載に揚がり、所在の伽藍、一期に還復し、前法を追召し、重ねて緇流を処す。然れば名の称せられ普ねく聞こえ、率先賞会するを以て、旧業に因循し、綜括すること尤も深し。漆木も未だ之疇ならず、簡直も何ぞ能く擬せん、固より道声の被むる攸にして、遐邇心を宅し、規猷を弘賛し、上国に光臨するを得。開皇十年、勅を下し徵召す。是に於いて卸駟載馳し、蒲輪轍を累ぬ。既に京闕に達し、帝心を啓沃し、上天の五相を陳べ、下聖の十善を明らかにす。乾坤遇ち久しく、終に非常を淪陷し、神理玄なりと雖も、畢に剋く繕おさめて朽ちる無し。天子欣然として、弘喩に爽う無し。召されて紫宸に入り、貞明を四后に扇ぎ、重ねて黄屋に居り、雲雨を六宮に布く。乃ち權道三謀、隱顯に縁る無く、機に随い九変し、容光に滞らざるを知る。事に従うに倫を以てす、固より其の宜しきなり。開皇十二年、四海を混一し、百王を撻溺し、車駕東巡し、泰岳に登封す。禅師諸宮の例に同じく、俱に齊境に来たり、創めて郷県に達し、載に俗心を動かし、懽慶相い高く、名望弥よ穆なり。又勅を下し為に新寺を立て、天華と賜号し、仍りて以て之に居らしむ。用て榮顯を隆くするの礼なり。十五年に至り、駕に随い京に入り、逾よ崇く欽重せらる。後に乖忤するに

及び、宮闈を出でんことを請う。中使流問し、馳道に相い望む。既にして奔りて四山に逼り、命は三相を摧き、自ら化期を識り、累ねて明允に□す。大業六年十一月一日を以て、本房に終す、春秋七十有五。嗚呼、哀しいかな。初め現疾し弥よ留まるも、晤言味き無し。其の終夕に及び、神光を洞發し、道俗雲蒸し、敬歎烟合す。又た音楽に感ず、委ねざるに何くに来たらん、繁会空に満ち、遠近通委す。

〔語釈〕

【隨文創曆……】 隋の建国（五八一）に伴う仏教復興。

古注）以蒲裏輪、取其安也。」

【蒲車】 車輪を蒲で覆い、ゆれを少なくした車。『漢書』卷六・

【五相】 觀法の五段階。通達菩提心、修菩提心、成金剛心、証金

武帝紀・建元元年「遣使車安車蒲輪、東帛加璧、徵魯申公。（師

剛心、仏心円満。

IV 玄懿①

〔訓読〕

玄懿法師有り、即ち第二阿闍梨なり。俗姓は展氏、同に齊州に住む。生縁の所天は、東魏徐州長史に任ぜらる。闍梨は幼くして幾神より挺きんじ、辯慧を生知す。年甫めて八歳、景いで四依に則る。尋いで解髪に預かり、欽崇嚴檢、履操の清白にして、冰霜より厲潔して、凝度の沖深にして、牆宇より重仞す。周ねく玄理を聴き、備さに幽求を酌み、言に重隱を問い、玄極を探索す。開権顯実の略、鳴謙摂度の功に至りては、前脩は断常に味く、後銳は得離に昏し。本幹を条緒し、筌蹄を啓索せざるは莫し。是を以て地論法華、其の林苑を鏡し、澄坐引決し、衆心に契洽す。四俗知帰すること、華陰の市に類する有りて、七貴請謁すること、稷下の門に臨むが如し。是れ蓮華闍法、独り舍衛の宮のみならざるを知り、寔に乃ち行高く安隱とし、道離車の邑に振るう。然れども徳を以て物宗と為し、神王清遠、珪璋内に映し、琴瑟外に和す。惠禪師と、生平久要なり。義光法光、□采して□映し、上流□流、沿沂いて俱に洽ねし。齊声同に召し、

遠く綸言に赴き、門徒十余、俱に來たり戻止す。留りて耕掖に連なり、高く德音を賞し、供錫駢羅し、珍味填積す。前後奏すること度僧三百余、礼恒条に異なり、將に万計に及ばんとす、皆福利を営み、広く莊嚴を事とす。時に歳聿云に暮れ、蒲柳悲しむべくして、頻りに陵謝を請うも、終に許しを蒙らず。仁寿に迄るまで、禁中に鎮処し、正範を昭明し、縁業を啓諭す。

〔語釈〕

【四依】 四つのよりどころ。法・義・智・經典。

為した故事。

【華陰市】 後漢の張楷が華陰に隱居した時、従つて学ぶ者が市を

V 玄懿②

〔訓読〕

会たま文祖晏駕し、煬帝臨朝す。恭しく厚德を承け、弥よ前務を隆くす。元德太子春坊に作貳し、賢能を搜選し、儀則を恢張す。大業元年、詔有りて、二閹梨をして太子の戒師為らしむ。遂即ち承明に延入せられ、資を稟け帰護し、諸に居ること屢は積む。祈告因る莫く、掩うに天綱を以てし、寧処に違あらず、沈憂景を變じ、両宮に視聴せらる。乃ち勅を下し、京邑弘德里に於いて為に道德道場を立て、所有る門人並びに出住するを聴し、四事の供給は、一に天府従りす。是に於いて複殿重敞にして、象設の光華を暢べ、簷廡高袤にして、衆侶の榮采を顯らかにす。加うるに以て制度嚴整、儀範肅彰なり。儕流之を仰ぎ則を成すに預有る。且つ夫れ生なるや涯有り、恒化新新の變を懷き、心なるや滅せず、伝火念念の徴を啓く。天慈遺せず、相い従い物故す。大業十一年八月一日を以て、本寺に終す、春秋七十有四。惟だ此の二師のみ、言は行範為りて、克く十念を莊んにし、九思に惑う無し。上古の衣薪に達し、季代の棚塹に通ず。迺ち林葬

を終南山に行う。喪事資する所、並びに官給に帰し、贈贈の重、榮哀通備す。

〔語釈〕

【元德太子】 隋・煬帝の長子。諱は昭。大業元年、立太子。同二年、薨。『隋書』卷五九に伝あり。

念身・念死。

【十念】 念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・

【九思】 『論語』季氏、「君子有九思、視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思議。」

VI 十善①

〔訓読〕

大唐顯慶三年、道德寺主十善律師、即ち前法師の外甥なり。俗姓王氏、俗本太原。大父往に北齊青州長史に任ぜられ、官に因りて東夏し、遂に齊に家す。随祖法を開き、広く僧尼を度す。時に年七歳、預じめ法伍に霑おい、還た姨氏に依り、資りて師傳と爲し、三業憑准、六事規猷す。後京輦に移り、又親侍に処り、附仰兢勵し、敬愛せらるること逾いよ隆し。具戒より已後、業を律科に専らにし、節を憲章に条にし、清衆を規誡し、法海をして青田の穢を絶たしめ、士林をして白首の□を虧かしむるを致す。屢しば寺任に登り、細維正綱、仰ぎて惟れ懽喜し、重ねて滅法半千を請い、善く懲揚せられ、□途二莫し。茲の成教を慨き、佩結すること深衷なり。是を以て四儀を撰檢し、八敬を宗猷し、念慧を繩持し、英蹤を歩仰す。固より知る、金甌開教、寧ぞ羅衛宮中に在らん、蒙塵祈度、何ぞ祇洹門外に止まらんを。即ち斯の後嗣は前良を屑せず。原ぬるに夫れ至人の布化なるや、妙は出づるを以て言先を為す有り、其の大綱を擧げ、畢に依を学ぶを用て行本と爲す。豈□□□□品、惟聖の良基、脩行道賢の明約を説くが如し。道孤運せず、故に三号をして三師に冠たらしめ、人能く道を弘むるは、是れ則ち三業は三学に備わる。一時の准的、万葉の舟航と謂うべきにして、□すべからざるなり。

〔語釈〕

【青州長史】 青州は現在の山東省。長史は州の次官。

弘之由人。」

【道不孤運】 『出三藏記集』 卷八・維摩經序第十二「道不孤運、

## VII 十善②

〔訓読〕

律師永く惟うに鞠育の重□、穹旻に格り、慈□の□恩、岬帖より隆し。誠に知る、徳高くして賞せられず、賞するに非ずして以て勞に酬ゆべけん、惠深きも謝せられず、謝するに非ずして能く理に通ぜん。日月逾いよ遠く、風支の恨追う莫く、容景鎖亡し、梁摧の慟何ぞ及ばん。重□年將に八十ならんとす。四選交ごも臨み、崦嵫の想既に懸かにして、松檟の悲弥いよ切なり。將に恐る、芳猷寂漠にして、終古を超えて聞かず、高行漸やく離れ、後葉に咨るに誰か紀さんことを。所以に誠を投じ寄有りて、此の豊碑を樹て、將に田海互いに遷るも、芳規を紹ぎて絶つ靡く、神□交ごも運るも、敬愛を統べて遺すこと無からしめんとす。方に碑の後面に仏の靈儀を図き、福履もて之を綏め、往識を津梁するを得んことを庶う。又た碑の後面に、二師を刊像し、資輔を列位し、用て昭穆を陳ぶ。初め太宗天経に升遐するを以て、京に□を弘徳坊に立て、寺宗正宮に置き、尼衆北移して休祥里に在り、即ち今の道德寺是れなり。事前後に涉らば、遲疑有るを恐れ、敢えて具して昭揚し、相い昏没する無く、序して已まず、頌えて以て之を乱む。其の詞に曰わく、

〔語釈〕

【岬帖】 父母を指す。『詩經』 国風・魏風・陟「陟彼岬兮、瞻望父兮、父曰嗟予子、……、陟彼岬兮、瞻望母兮、母曰嗟予季。」

【風支】 風枝。父母に孝養できぬ歎き。

【崦嵫】 山の名、現在の甘肅省。日没する所、転じて人の晩年。『楚辭』 離騷「吾令羲和弭兮、望崦嵫而勿迫。」

【天経】 天の常道。また、広く天を指す。

## VIII 銘

## 〔訓読〕

□□終古、浩然として太だ素、神理茫昧、誰か其れ津渡せん。ああ惟れ至覚、肇めて明悟を開く。律を三章に□し、図を八務に披く。十部周衛し、五衆来儀す。古今の化範にして、賢聖規を成す。激迪慮に在り、鎔裁危を致し、陶誘重ねて請い、深文遂に馳す。倬いなるかな大師、教は名色を開く。道は神解を疎し、慧は念力を清くす。性霊を彫琢し、幽極を昭章す。心期の漸すむ所、惟れ幾ど孔棘なり。□允宗貳、賛叶務成、経緯剖裂し、辯拠遐明なり。権に乗り□実、綱を控じ持衡す。蒸して仍りて学□、其の後生に貽る。有周道喪われ、玄綱紐を絶ち、惟れ随建国し、大いに休各(咎)を通ず。重ねて釈門を敞き、載に仁寿を揚ぐ。金表天より臨み、玉堂殷阜たり。徳は物議を延べ、声の敷く攸を采る。徴して玄圃に帰り、言に黄図に謁す。宮闈□化、見日幽都、高く宸両に謝し、識は変じて施途す。綸言既に被り、道場斯に立ち、阜を王城に置き、天邑を崇衡す。棟宇風翔し、清徒鱗集し、弘徳に昔構え、休祥に今葺く。五福未だ窮めず、三霊或いは爽う。嗟乎保傳、相従い化往す。白日雲昏、青山霧上、声色寂遼にして、因りて鑽仰する無し。昔縁もて膜拜し、儻徊空首し、尔の宅心を霈し、恂に善誘を□す。厚德未だ晞かず、名を身後に埋め、霜露□感、焉に於いて永久なり。之を銘し之を図し、去るに期無く、營魄安くにか往かん、神道何ぞ息まん。景山を仰ぎて則を取り、貞石に寄せて詞を陳べ、茂実を来際に騰し、風声の茲に在るを顧みる。

吏部文林郎□範筆

### 三 大智禪師碑

#### 〔解題〕

碑主の大智禪師・義福は禪宗の法系では北宗六祖の神秀の弟子とされる人物で、『宋高僧伝』巻九及び『旧唐書』巻一九一「方伎伝」に伝がある。義福には杜昱の手による「大智禪師塔銘」があり、この碑文を補完するものとなっている。『宋高僧伝』・『旧唐書』ともに嚴挺之碑の存在をいうが、これらの伝が記す内容は碑文とは一致しない。中書侍郎・嚴挺之は華州華陰の人。『新唐書』巻一二九、『旧唐書』巻九九に伝がある。

右羽林軍録事參軍集賢院待制兼校理・史惟則は広陵（江蘇省揚州市）の人で、名は浩であるが字の惟則が通行している。『新唐書』『旧唐書』ともに立伝していないが、当時の著名な書家であり、『金石萃編』引『庚子鎖夏記』には「惟則分隸爲開元時第一」とあり、数多くの碑文をものしたがその大半は失われ、この「大智禪師碑」は彼の字を実際に残している碑文としても価値がある。

この「大智禪師碑」でもっとも注目すべき点は「大通之傳付者河東普寂與禪師二人。即東山繼德七代于茲矣。」とある部分であろう。現在では「東山繼德七代」、つまり、北宗禪第七祖といえは普寂を指すのが一般的であるが、この碑文中の記述は異なる。常盤大定は『支那仏教史蹟評解』で、「此碑文は、禪宗史上重要な価値を有す。禪史には惠能以後の所謂南禪の系譜を説く事甚だ詳なるに關らず、神秀の所謂北禪の法統を全く閑却し、甚しきは神秀の後を嗣ぐが如くに考ふるものあり。（中略）南禪が南岳と青原との二人を以て、第七祖とせば、北禪はまた普寂と義福とを以て、第七祖とするの意明了に看取せらる。」と述べる。ここにあるように、南宗が慧能の後継者を二人いるとすることに対して普寂と

義福がともに法を受け継いだと主張した可能性がある。

恩旨をもって東都洛陽に呼ばれたことや「大智」の号が皇帝より下されたものであることは、義福と唐王朝とを結びつける、何らかのつながりがあったことを証するものであり、また、この碑文の書者である史惟則が、普寂の碑文である「大照禪師碑」も書した人物である点も見逃せない。これらの点からみても、義福が神秀の「その他大勢の弟子の人」ではなく、普寂と同等の法嗣であったといえるのではないか。

以上のことからこの碑文は常盤大定のように、禪宗研究史上で重要な位置を占めるものであるといえよう。なお、この碑は西安碑林に現存しており、西安碑林博物館編の『碑林』四（一九九六）には張伯齡「《唐大智禪師碑》考釋」が載せられて嚴挺之や史惟則についてもここに詳しく述べられている。

（福井 敏）

# 〔釋文〕

大唐故大智禪師碑銘并序

中書侍郎嚴挺之撰

右羽林軍錄事參軍集賢院待制兼校理史惟則書并篆額

夫聖人以仁德育物者。則體泉潛應而湧。嘉禾不播而植。神功以不宰寧運者。則玄宗會境而立。正法由因而備。然則有靈允荅。爰九疇而式敍。無爲克成。超萬／象而弘濟。暨今上文明大開淨業。溥福利眞慈之澤。闢權智衆善之門。

精求覺藏。汲引僧寶。往必與親。念則隨應。張皇通達之路。騰演元亨之衢者。其惟我大智禪師乎。

禪師諱義福。上黨銅鞮人也。俗姓姜氏。系本於齊。官因於路。載鴻休於邦詠。踐貞軌於家範。曾祖鴈門令。大父烈考。竝棲尚衡門。禪師始能／言。已見聰哲。稍有識。便離貪取。先慈矜異。遺訓出家。年甫十五。遊於衛。觀藝于鄴。雖在白衣。已奉持沙門清淨律行。始爲鄴衛之松栢矣。乃遠迹尋詣。探極冥搜。／至汝南中流山靈泉寺。讀法華維摩等經。勤力

不倦。時月遍誦。略無所遺。後於夜分。端唱經偈。忽聞庭際若風雨聲。視之。乃空中落舍利數百粒。又於都福先寺。師事拙法師。廣習大乘經論。區折理義。多所通括。以爲未臻玄極。深求典奧。時嵩嶽大師法如。演不思議要用。特生信重。夕惕不遑。既至而如公遷謝。悵然悲憤。追踐經行者久之。

載初歲。遂落髮。具戒律。行貞苦。自尔分衛。一食而已。聞荊州玉泉道場大通禪師。以禪惠兼化。加刻意誓行。苦身勵節。將投勝緣。則席不暇暖。願依慈救。故遊不滯方。既謁大師。率呈操業。一面盡敬。以爲真吾師也。大師乃應根會識。垢散惱除。既而攝念慮。棲榛林。練五門。入七淨。毀譽不關於視聽。榮辱／豈繫於人我。或處雪霜。衣食罄匱。未嘗見於顏色有厭苦之容。積年鑽求。確然大悟。造微而內外無寄。適用而威儀不捨。大師乃授以空藏。印以摠持。周旋十年。／不失一念。雖大法未備。其超步之迹。固以遠矣。後大師應召。至東都天宮寺。現疾。因廣明有身之患。唯禪師親在左右。密有傳付。人莫能知。後聖僧萬迴遇見禪師。謂衆人曰。弘通正法。必此人也。

神龍歲。自嵩山嶽寺。爲羣公所請。邀至京師。遊於終南化感寺。棲置法堂。濱際林水。外示離俗。內得安神。宴居寥廓。廿年所。時／有息心貞信之士。抗迹隱淪之輩。雖負才藉貴。鴻名碩德。皆割棄愛欲。洗心清淨。齋莊肅敬。供施無方。或請發菩提。或參扣禪契。有好慕而求進修者。有厭苦而／求利益者。莫不懇誓專一。披露塵惱。禪師由是開演先師之業。懋宣至聖之教。語則無像。應不以情。規濟方圓。各以其器。陶津緣性。必詣其實。廣燎明哲之燈。洞／鑒昏沉之路。心無所伏。故物無不伏。功不自已。乃功無不成。迷識者以悟日新。愛形者由化能革。不遠千里。曾未旬時。騰溱道場。延袤山谷。所謂旃檀移植。異類／同薰。摩尼迴曜。衆珍自積。其若是乎。如來以四諦法。濟三乘衆生。以八正道。示一切迷惑。其或繼之者善。成之者性。非夫行可與真靜齊致。道可與灋身同體者。／固難議於斯。開元十年。長安道俗。請禪師住京城慈恩寺。十三年。皇帝東巡河洛。特令赴都。居福先寺。十五年。放還京師。廿一年。恩旨復令／入都。至南龍興寺。曰。此人境之靜也。遂留憩焉。沙門四輩。靡然向風者。日有千數。其因環里市。絕葷茹而歸向者。不可勝計。

廿三年秋八月。始現衰疾。閉關晦養。／不接人事。誠諸門徒曰。吾聞道在心不在事。法由己非由人。當自勤力。以濟神用。衆以爲付屬之萌也。明年夏五月。加疾減膳。廿四日申酉之間。有白虹十餘道。／通亘輝映。久而不滅。廿五日際晚。攝念開顏。謂近侍數人云。本師釋迦。示現受生。七十有九。乃般涅槃。吾今得佛之同年。更何所住。又云。臥去坐去。亦何差別。便／右脇枕手。疊足而臥。此則知身非實。處疾不亂。奄忽棄世。無覺知者。皇帝降中使。特加慰贈。尋策諡號。曰大智禪師。即大智本行。皆悉成就。以禪師／能備此本行也。

禪師法輪。始自天竺達摩。大教東派。三百餘年。獨稱東山學門也。自可璨信忍。至大通。遞相印屬。大通之傳付者。河東普寂與禪師二人。即東山／繼德。七代于茲矣。

禪師性篤仁厚。天姿通簡。取捨自在。深淨無邊。苦己任眞。曠心濟物。居道訓俗。不忘於忠孝。虛往實歸。尤見其困默。有無不足定其體。名數安／能極其稱。玄波難挹。高棟云摧。既離形器之表。當會神通之域。粵七月六日。遷神于龍門奉先寺之北岡。威儀法事。盡令官給。樞紳縞素者數百人。士庶喪服者／有萬計。自鼎門至于塔所。雲集雷動。信宿不絕。棺將臨壙。有五色祥雲。白鶴數十。雲光鶴影。皆臨棺上。鬱鬱徘徊。候掩而散。近古歸墓靈相。未有如斯之盛也。

禪／師之季。曰道深。力方墳而心盡。弟子莊濟等。營豐碑而志勤。伊余識昧。昔嘗面稟。非以文詞取拙。將爲剋慕在懷。覽江夏立銘。涕增橫墜。觀太原成論。悲甚慨然。／攀緣苦集。願望都斷。有太僕卿濮陽杜昱者。與余法利同事。共集禪師衆所知見實錄。其餘傳聞。不必盡記。且離生滅是究竟無餘。鏤盤孟乃古今難沫。顧才不／稱物。短綆汲深。猶昔人稽首東向。獻心廬嶽者。以爲懇慕之極。沉鐫刻永世。不猶愈乎。其銘曰。／

契眞慈者。道爲物先。靈力幽授。降劫生賢。爰茲大士。寂照弘宣。惠超三業。心空四禪。德溥甘露。言感清泉。翱翔宗極。念護無邊。猶彼檀施兮。福未嘗有。如彼戒瓶／兮。物無不受。石無磷兮白不涅。栢耐霜兮竹停雪。今將遺世兮無有量。永離蓋纏兮辭生滅。門人法侶兮無歸仰。刻琰琬金兮狀高節。望廬山兮摧慕。瞻朗谷兮／悲絕。／

開元廿四年。歲在丙子。九月丁丑朔十八日甲午建

史子華刻字／

## I 序言

### 〔訓読〕

大唐故大智禪師碑銘并びに序

中書侍郎敞挺之撰

右羽林軍録事參軍集賢院待制兼校理史惟則書并びに篆額

夫れ聖人は仁徳を以て物を育くむ者なれば、則ち醴泉は潜かに応じて湧き、嘉禾は播かずして植う。神功は不宰を以て運を寧ずる者なれば、則ち玄宗は境に会いて立ち、正法は因に由りて備わる。然らば則ち有靈の允荅、九疇を爰きて式て叙し、無為の克成、万象を超えて弘く済う。今上の文明もて、大いに淨業を開くに暨び、福利真慈の沢を薄くし、権智衆善の門を闢く。覺蔵を精求し、僧宝を汲引す。往けば必ず与に親しみ、念ずれば則ち随い応ず。通達之路を張皇し、元亨の衢を騰演する者は、其れ惟れ我が大智禪師なるか。

### 〔語釈〕

【中書侍郎】 正四品上。

【右羽林軍録事參軍】 正八品上。

【集賢院待制兼校理】 待制官、校理官はともに集賢殿書院に属す。『大唐六典』卷九に「(開元)十三年、…改名集賢殿修書所為集賢殿書院。五品已上為學士。六品以下為直學士。…其後更置修撰・校理官。只有待制官。」とあり、『旧唐書』卷四三・職官志二に「修撰官・校理官。並無常員。以官人兼之。待制官。古之待詔金馬門是。」とある。

【醴泉潜応而湧、嘉禾不播而植】 「醴泉」は甘美な水のわく泉。

「嘉禾」は穂の多く付いたためたゐ穂。ともに公平な政治を行つた際の瑞応。『論衡』講瑞に「嘉禾生於禾中、与禾中異穂、謂之嘉禾。醴泉、甘露出而甘美也、皆泉露生出、非天上有甘露之種、地下有醴泉之類。聖治公平、而乃沾下產出也。」とある。

【玄宗】 玄妙なる宗旨。僧肇の「注維摩詰經序」に「而恨支竺所出、理滯於文、常懼玄宗墜於詛人。」とある。

【今上】 唐の第六代皇帝玄宗・李隆基（六八五―七六二）。

【文明】 徳や教養があつて立派なこと。『尚書』舜典に「濬哲文明、溫恭允塞。」とある。

【浄業】 仏教をいう。『觀無量壽仏經』に「此三種業、過去未來現在三世諸仏浄業正因。」(大正一二・三四一下)とある。

【福利真慈之沢】 「真慈」は用例未詳。まことの慈悲の意か。「福利」はしあわせ。『後漢書』仲長統伝に「姦人擅無窮之福利、而

善士掛不赦之罪辜。」とある。

【權智衆善之門】 「權智」は方便の意。『大日經』二に「諸仏甚希有、權智不思議。」とある。「衆善」は多くの善。『呂氏春秋』応同に「堯為善而衆善至、桀為非而衆非來。」とある。

【僧宝】 仏教三宝の一。『法門名義集』に「三宝、仏宝、法宝、僧宝。」(大正五四・一九九中)とある。

## II 義福の幼・青年期

### 〔訓読〕

禪師諱は義福、上党銅鞮の人なり。俗姓は姜氏。系は齊に本づき、官は路に因る。鴻休を邦諫に載せ、貞軌を家範に踐む。曾祖は鴈門令。大父・烈考は、並びに衡門を棲尚す。禪師始め能言にして已に聰哲を見らわす。稍や識有りて便ち貪取を離る。先慈矜れみ異とし、出家を遺訓す。年甫めて十五にして衛に遊び、鄴に觀芸す。白衣に在ると雖も、已に沙門の清浄律行を奉持し、始め鄴・衛の松柏と為る。乃ち遠迹尋ね詣り、極を探り冥搜す。汝南中流山靈泉寺に至り、法華維摩等の經を読む。勤力倦まず、時月遍く誦す。略ぼ遺す所なし。後夜分に於いて、經偈を端唱するに、忽ち庭際に風雨の声の若きを聞く。之れを視るに、乃ち空中より舍利數百粒を落つ。又た都の福先寺に於いて拙法師に師事し、広く大乘の經論を習う。理義を区折(析)し、通括する所とする多きも、以為らく未だ玄極に臻らず、深く典奥を求めんと。時に嵩嶽大師の法如、不思議要用を演ぶ。特に信重を生じ、夕惕して違あらず。既にして至るも如公遷謝す。悵然として悲憤し、追踐し經行すること之れを久しくす。

【語釈】

【上党銅鞮】 山西省長治県。

【鴻休】 大善、美徳のこと。

【邦諫】 異国に派遣されたスパイのことであるが、それでは意味が通じない。邢澍・楊紹廉『金石異体字典』に「諫」字を「牒」とするのに従えば、国に伝わる記録のこと。

【曾祖鴈門令】 「鴈門」は山西省代県。義福の曾祖父については、杜昱碑に「曾祖仲遷、隋武陟丞雁門令。」とある。姜仲遷は伝未詳。

【大父烈考】 杜昱碑に「大父子胤、烈考解脫、並丘園養徳、隱居不仕。」とある。姜子胤、姜解脫はいずれも伝未詳。

【先慈】 亡くなった母親。

【清浄】 悪行の過失を離れて煩惱の垢を離れること。『俱舍論』一六に「諸身語意三種妙行、名身語意三種清浄。」とある。

【鄴衛】 いずれも河南省の地名。

【冥搜】 力を尽くして尋ね求める。孫綽の「游天台山賦」に「非夫遠寄冥搜、篤信通神者、何肯遙想而存之。」とある。

### III 神秀との出会い

【訓読】

戴初の歳（六九〇年）、遂に落髪す。戒律を具し、貞苦を行ず。尔れより分衛するも、一食のみ、荊州玉泉道場の大通禪師以て禅恵兼ねて化し、加えて刻意誓行、苦身勵節なるを聞く。將に勝縁に投ぜんとすれば、則ち席、暖むるに暇あらず。

【汝南中流山靈泉寺】 中流山、靈泉寺はともに未詳。

【福先寺】 『唐会要』四八に「福先寺、遊芸坊、武太后母楊氏宅、上元二年立為太原寺、垂拱三年二月改為魏国寺、天授二年改為福先寺。」とある。

【拙法師】 僧伝類に記載なし。ただし、穴山考道氏や柳田聖山氏はこの拙法師を『伝法宝紀』や「南岳思禪師法門伝」の作者・杜拙のこととする。

【玄極】 玄妙深微なことの形容。僧佑の「明仏論」に「孔氏之訓資釈氏而通、可不曰玄極不易之道哉。」とある。

【嵩嶽大師法如】 弘忍の弟子・潞州法如のこと。しかし、この法如を禪宗第六祖とし、次の神秀を七祖とする説もあった。伝に『法如禪師行状』がある。

【遷謝】 遷化・示寂と同義。

【経行】 原義は、坐禪中に睡眠を催したとき、これを防ぐために一定の場所を旋繞往來すること。『法華經』序品に「又見仏子、未嘗睡眠、経行林中、勤求仏道。」（大正九・三中）とある。

慈悲に依らんと願うが故に遊びて方に滞らず。既にして大師に謁す。率かに操業を呈し、一面して敬を尽くす。以て真の吾が師と為すなり。大師乃ち根に応じ識を会す。垢散じ悩除かる。既にして念慮を摂めて、榛林に棲み、五門を練り、七浄に入る。毀誉は視聴に聞せず、榮辱豈に人我に繋かれんや。或いは雪霜に処し、衣食磬匱するも、未だ嘗て顔色に厭苦の容有るを見さず。積年鑽求して、確然として大悟す。微に造りては内外寄す無く、用に適しては威儀捨てず。大師乃ち授くるに空蔵を以てし、印するに摠持を以てす。周旋すること十年、一念を失わず。大法未だ備わらずと雖も、其の超歩の迹、固に以て遠し。後に大師召に応じて東都天宮寺に至りて疾を現す。因りて広く有身の患を明かにす。唯だ禪師のみ親しく左右に在り。密かに伝付する有れども、人能く知る莫し。後、聖僧万迴遇たま禪師に見ゆ。衆人に謂いて曰く、正法に弘通するは、必ず此人なりと。

〔語釈〕

【貞苦】 志を持って苦行を行うこと。『梁高僧伝』竺僧輔伝に「少持戒行、執志貞苦、学通諸論、兼善經法。」(大正五〇・三五五中)とある。

【分衛】 僧人の乞食をいう。『梁高僧伝』釈智嚴伝に「嚴在寺不受別請、常分衛自資。」(大正五〇・三三九中)とある。

【荊州玉泉道場大通禪師】 北宗禪第六祖の神秀のこと。この碑文の作者である嚴挺之は義福を禪宗第七祖とする立場をとっている。

【勝縁】 善き縁。梁武帝「游鍾山大愛敬寺」詩に「駕言追善友、迴興尋勝縁。」とある。

【慈悲】 慈悲の救い。『梁高僧伝』竺道壹伝に「故道深常隱、志

存慈悲、故遊不滯方、自東徂西。」(大正五〇・三五七上)とある。

【故遊不滯方】 慈悲と同様に『梁高僧伝』竺道壹伝を典拠としている。前注を参照せよ。

【念慮】 思慮。『淮南子』説山訓に「念慮者不得臥、止念慮則有為其所止矣。」とある。

【五門】 五門禪(無常義、苦義、空義、無我義、寂滅義)のこと。

【七浄】 七浄華のこと。戒浄・心浄・見浄・度疑浄・分別道浄・行断知見浄・涅槃浄の七つ。『維摩經』仏道品に「八解之浴池、定水湛然滿、布以七浄華、浴此無垢人。」(大正一四・五四九下)とある。

【人我】「我見の一。一切の凡夫人身は五蘊の假和合なるを了せず、人に常一の我体ありと固執する悪見。」

【処雪霜】釈迦如来が六年間、雪山で苦行したことを踏まえたものか。王勃の「釈迦如来成道記」に「棲雪嶺錫於六年。」道誠の

註に「言六年者、是太子在雪山示修苦行究境之數。」とある。【天宮寺】寺名。洛陽尚善坊北にあり。

【万迴】『宋高僧伝』卷一八に伝あり。（大正五〇・八二三下）ただし、伝の本文中には義福に関する記述は見られない。

#### IV 義福の活躍

##### 【訓読】

神龍の歳（七〇五年～七〇七年）、嵩山嶽寺より羣公の請う所と為り、邀えられて京師に至り、終南の化感寺に遊ぶ。法堂に棲置し、林水に浜際す。外に離俗を示し、内に安神を得。寥廓に宴居すること廿年所、時に息心貞信の士、抗迹・隠淪の輩有り。負才藉貴、鴻名碩徳と雖も、皆愛欲を割棄し、洗心清浄たり。齊莊肅敬として、供施無方なり。或いは菩提を発するを請い、或いは禪契に参扣す。好慕して進修を求める者有り。厭苦して利益を求める者有り。懇誓専一、塵悩を披露せざるは莫し。禪師是れに由りて先師の業を開演し、懇めて至聖の教を宣ぶ。語は則ち像無く、応に情を以てせざるべし。方円を規濟し、各おの其の器を以てす。縁性を陶津し、必ず其の実に詣る。広く明哲の燈を燎き、洞らかに昏沈の路を鑑す。心に伏する所無し。故に物伏さざるはなし。功は己よりせざれば、乃ち功の成らざるはなし。識に迷う者は悟を以て日々新たにし、形を愛する者は化に由りて能く革む。千里を遠しとせず。曾て未だ旬時ならざるに、道場に騰湊し、山谷を延袤す。所謂脩檀植を移せば、異類薫を同じくし、摩尼曜を迴らし、衆珍自ら積むとは、其れ是の若きか。如来四諦法を以て三乗の衆生を済い、八正道を以て一切の迷惑に示す。其れ或いは之れを継ぐ者は善。之れを成ずる者は性。夫の行は真静と致を齊しくすべく、道は法身と体を同じくすべき者にあらずんば、固より斯くに識し難し。開元十年（七三二年）、長安の道俗、禪師に請いて京城慈恩寺に住まわしむ。十三年（七二五年）、皇帝東のかた河洛

を巡る。特に都に赴かしめ、福先寺に居せしむ。十五年(七二七年)、放<sup>お</sup>されて京師に還る。廿一年(七三三年)、恩旨ありて復び都に入れしむ。南龍興寺に至りて曰く、此れ人境の静なりと。遂に焉に留まり憩う。沙門四輩、靡然として風に向かう者は、日に千数有り。其の因りて里市を環り、葷茹を絶ちて帰向する者は、勝<sup>あ</sup>げて計う可からず。

【語釈】

【息心】 梵語。沙門(Sramana)の古訳。

【隱淪】 隱居している状態。謝靈運「入華子岡是麻源第三谷」詩に「既枉隱淪客、亦棲肥遯賢。」とある。

【皆割弃愛欲。洗心清淨。】 『梁高僧伝』竺道壹伝に「是以殊域之人不遠万里、被褐振錫洋溢天邑、皆割愛棄欲、洗心玄遐期曠世。」(大正五〇・三五七上)とあり、この部分の記述はこれを踏まえたものと考えられる。

【規濟】 今あるものを救うこと『梁高僧伝』道安伝に「居道訓俗、微績兼著、豈直規濟当今、方乃陶津来世。」(大正五〇・三五二下)とある。

【陶津】 育て導くこと。前注参照。

【洞鑑】 明らかにする。『文心雕龍』物色に「然屈平所以能洞監、風騷之情者、抑亦江山之助乎。」とある。

V 遷化及び大智の賜号

【訓読】

廿三年(七三五年)秋八月、始めて衰疾を現す。関を閉じて晦養し、人事に接せず。諸門徒を誡めて曰く、吾れ聞く、道

【騰湊】 集まってくること。王延寿の「魯靈光殿賦」に「飛梁偃蹇以虹指、揭遽遽而騰湊。」とある。

【延袤】 延々と連なるさま。王巾の「頭陀寺碑文」に「層軒延袤、上出雲霓。」とある。

【異類】 生きているものすべて。王勃の「釈迦如来成道記」に「異類変容、同現奢華之血。」とある。

【四諦】 苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つ。仏が鹿野苑で初めて説いた法。『法華経』譬喻品に「昔於波羅奈、転四諦法輪。」(大正九・一二上)とある。

【八正道】 八正分道のこと。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定。

【皇帝東巡河洛】 この年の十一月に玄宗は封禅の儀式を行っている。そのときのことか？

は心に在りて事に在らず。法は己に由りて人に由らに非ず。当に自ら勤力し、以て神用を済うべしと。衆以て付属の萌と為すなり。明年夏五月、疾加わりて膳を減ず。廿四日申酉の間、白虹十余道有り。通亘輝映し、久しく滅えず。廿五日の際晩、摂念開顔し、近侍数人に謂いて云く、本師釈迦は受生を示現すること七十有九にして、乃ち般涅槃す。吾れ今仏の同年を得たり。更に何ぞ所住せんと。又た云う、臥して去き坐して去く、亦た何の差別あらんと。便ち右脇枕手して、足を疊ねて臥す。此れ則ち身の実に非ざるを知る。疾に処するも乱れず、奄忽として世を棄つ。覚知する者なし。皇帝中使を降して特に慰贈を加え、尋いで諡号を策して大智禪師と曰う。即ち「大智本行、皆な悉く成就す」と。禪師の能く此の本行を備えるを以てなり。

〔語釈〕

【本師釈迦。示現受生。七十有九。乃般涅槃。】一般的に説明される所によれば釈迦の死亡時の年齢は八十歳であり、この碑文の記述とは一致しない。厳挺之がどういった資料によったのかは現在のところ未詳である。

【大智本行。皆悉成就。】『維摩經』仏国品に「大比丘衆八千俱。菩薩三万二千。衆所知識。大智本行皆悉成就。諸仏威神之所建立。」(大正一四・五三七上)を踏まえた記述である。

VI 禅宗の法系

〔訓読〕

禅師の法輪、始めは天竺達摩よりす。大教東に派<sup>わか</sup>れて三百余年、独り東山の学門と称するなり。可・璨・信・忍より大通に至るまで、通いに相い印属す。大通の伝付する者は、河東の普寂と禅師と二人なり。即ち東山の徳を継ぐもの、茲に七代なり。

## 【語釈】

【天竺達摩】 菩提達摩（？～四九五？） 中国禪宗の初祖。『統高僧伝』巻一六等に伝あり。

【東山学門】 禪宗のこと。

【可璨信忍】 それぞれ禪宗の第二祖・第五祖の恵可・僧璨・道信・弘忍のこと。

【至大通】 大通は前述のごとく神秀のことである。弘忍のあと、禪宗は神秀の北宗禪と慧能の南宗禪に分かれるが、碑主の義福

は北宗禪に属しており、嚴挺之も慧能やその後継者である南宗禪のことについては碑文中ではふれていない。

【河東普寂】 大通神秀のあとを継いだ中国北宗禪の第七祖。（六一一～七三九）『宋高僧伝』巻九に伝あり。一般的には北宗禪第七祖は普寂一人であり、この碑のように義福を並べて挙げたものはほかには見受けられない。

## VII 禅師の葬儀

## 【訓読】

禅師は性篤く仁厚く、天姿は通簡なり。取捨自在にして、深浄無辺なり。己を苦しめ真に任し、心を曠くして物を済う。道に居り俗を訓じ、忠孝を忘れず。虚往実帰は尤も其の困（淵）黙を見す。有無は其の体を定めるに足らず、名数安んぞ能く其の称を極めん。玄波挹み難く、高棟云に摧けん。既に形器の表に離れ、当に神通の域に会すべし。粵に七月六日、神を龍門奉先寺の北岡に遷す。法事を威儀するに、尽く官給せしむ。檀（檀）紳の縞素する者は数百人。土庶の喪服する者万もて計うる有り。鼎門より塔所に至るまで、雲のごとく集まり雷のごとく慟すること信宿絶えず。棺將に壙に臨まんとするに、五色の祥雲、白鶴數十有り。雲光鶴影、皆な棺上に臨み、鬱鬱として徘徊し、候掩として散ず。近古の墓に帰するの靈相、未だ斯の如きの盛有らざるなり。

## 【語釈】

【自在】 心や煩惱の繫縛を離れて通達無碍なること。『法華経』

序品に「尽諸有結心得自在。」（大正九・一下）とある。

【深浄】 清浄なことが甚だ深いさま。『法華經』方便品に「舍利仏当知、我聞聖師子深浄微妙音、喜称南無仏。」（大正九・九下）とある。

【無辺】 广大にして返際なきこと。『法華經』藥王菩薩本事品に「若有人聞是藥王菩薩本事品者、亦得無量無辺功德。」（大正九・五四中）とある。

【困黙】 淵黙。深く静かなさま。『莊子』在宥に「尸居而龍見、淵黙而雷声。」とある。「淵」を「困」とするのは高祖・李淵の諱を避けたためである。

【有無】 常見と断見。一切の邪見はこの二つに納まり、これより一切の邪見が生じる。『法華經』方便品に「入邪見稠林若有若無

等、依止此諸見、具足六十二。」（大正九・八中）とある。

【奉先寺】 河南省洛陽鼎龍門にある寺。

【威儀】 儀礼を規則通りに行うこと。『法華經』序品に「又見具戒威儀無缺。」（大正九・三中）とある。

【搢紳】 腰に紳をさすこと。後、儒者の代称に用いる。『東觀漢記』明帝紀に「是時學者尤盛、冠帶搢紳、遊雅而觀化者、以億万計。」とある。

【縞素】 白色の喪服。『史記』高祖本紀に「今項羽放殺義帝於江南、大逆無道。」とある。

【靈相】 神仏の妙相。沈約「釈迦文仏像銘」に「仰尋靈相、法言攸吐。」とある。

## VIII 建碑の動機

### 〔訓読〕

禪師の季、道深と曰う。方墳に力めて心尽くす。弟子の莊濟等、豐碑を営んで志勤む。伊余識味きも、昔嘗て面稟す。文詞の取拙を以てするに非ず、將に剋慕の懷いに在るを為さんとす。江夏に銘を立てるを覽ては、涕増すます横墜し、太原に論を成すを觀ては、悲しみ甚だ慨然たり。攀縁の苦集、願望都断たる。太僕卿濮陽の杜昱なる者有り。余と法利事を同じうす。共に禪師の、衆に知見せらるる実録を集め、其の余の伝聞は、必ずしも尽くは記さず。且つ生滅を離るるは是れ究竟無余、盤盂に鏤るは乃ち古今難沫。顧みるに才の物に称わず、短綆汲深なり。猶お昔人の稽首して東向し、心を廬嶽に献ずる者の以て懇慕の極と為すがごとし。況んや永世に鐫刻し、猶お愈えざるをや。其の銘に曰く、

【語釈】

【道深・莊濟】 いずれも伝未詳。

【江夏】 湖北省武昌県。

【太原】 山西省陽曲県。

【攀縁】 俗縁にたずさわること。※元稹「悟禪詩」に「病宜多宴

坐、貧似少攀縁。」とある。

【太僕卿濮陽杜昱】 「大智禪師義福塔銘」の作者。『新唐書』は杜

暹の異母弟とする。

【法利】 仏法上の功德・利益。『法華経』分別功德品に「説得法

利者、歡喜充徧身。」(大正九・四四中)とある。

【究竟無余】 完全なる涅槃をいう。

【短綆汲深】 才能や力の及ばないこと。『莊子』至樂に「褚小者

不可以懷大、綆短者不可以汲深。」とある。

## IX 銘

【訓読】

真慈に契う者は、道を物の先と為す。靈力幽授し、降刼賢を生ず。爰茲に大士、寂照弘宣し、恵は三業を超え、心は四禪に空たり。徳は甘露に溥くし、言は清泉に感ず。翺軒宗極、念護無辺。猶お彼の檀施、福の未だ嘗て有らざるがごとく、彼の戒瓶、物の受けざるはなきが如し。石は磷なく、白は涅まらず。栢は霜に耐え、竹は雪を停む。今將に遺世せんとするに有量なく、永えに蓋纏を離れ生滅を辞す。門人法侶帰仰するなく、琰に刻み金に瑠して高節を状す。廬山を望みて摧慕し、朗谷を瞻て絶ゆるを悲しむ。

開元廿四年。歳は丙子に在り。九月丁丑朔十八日甲午建つ。

史子華刻字す。

【語釈】

【寂照】 真理の体と眞智の用。『楞嚴經』六に「淨極光通達、寂

照含虚空。」(大正一九・一三一上)とある。

【弘宣】 教法を弘通し、宣法すること。『無量壽経』上に「処兜

率天、弘宣正法。」(大正二二・二六五下)とある。

【宗極】 所説の至極。沈約「神不滅論」に「窮其原本、尽其宗極。」とある。

【遺世】 塵世を超脱すること。孫綽「游天台山賦」に「非夫遺世

翫道、絶粒茹芝者。」とある。

【蓋纏】 蓋纏。五蓋と十纏。共に煩惱の数。『維摩經』仏国品に「悉已清淨、永離蓋纏。」とある。

## X 陰記

### 〔原文〕

大智禪師碑陰記

河南少尹陽伯成撰

夫道非言。言以明道也。／空非相。相以泯空也。／禪師彌天冥符。曠劫傳／印。出等等。騰非非。適來／時也。適去順也。上自／宸宸。下達蒸黎。纔仰青／蓮之光。旋驚白林之會。／中書侍郎嚴公。探祕藏。／決詞江。洋洋乎文宗。昭／昭乎靈迹。伯成殊昧先／覺。忝在後塵。糺合羣公。／激揚衆美。豈翰墨以云／朽。將金石以齊固。所謂／非六經。曷以明夫子也。／非四偈。曷以曉眞如也。／凡捨淨財者□□人。具／題爵里。于時歲在辛巳。／五月庚戌十八日丁卯。／皇唐開元廿九年也。／通直郎行河南府伊／闕縣尉集賢院待／制兼校理史惟則書／施碑石主弟子朝／散大夫行華原縣／令劉同

### 〔訓読〕

大智禪師碑陰記

河南少尹陽伯成 の撰

夫れ道は言に非ず、言は以て道を明かすなり。空は相に非ず、相は以て空を泯うなり。禪師弥天に冥符し、曠劫より印を伝う。出でては等を等とし、騰げては非を非とす。適たま来たるは時、適たま去るは順なり。上は宸宸より、下は蒸

黎に達するまで、青蓮の光を纔仰し、旋りては白林の会に驚く。中書侍郎の嚴公、秘藏を探り、詞江を決す。洋洋たるかな文宗、昭昭たるかな靈迹。伯成殊に先覺に昧く、後塵に在るを忝くす。羣公を糺合し、衆美を激揚す。豈に翰墨以て朽ちると云えども、將に金石以て固を齊しくせんや。所謂六經に非ざれば、曷んぞ以て夫子を明らかにせんや。四偈に非ざれば、曷んぞ以て真如を曉らかにせんや。凡そ淨財を捨する者□□人。具さに爵里を題す。時に歳は辛巳に在り。五月庚戌十八日丁卯。皇唐開元の廿九年（七四一）なり。

通直郎・行河南府伊闕県尉・集賢院待制兼校理史惟則書す。施碑石主弟子朝散大夫・行華原県令劉同。

【語釈】

【陽伯成】 伝未詳。

【曠規】 久遠の切。※李白「地藏菩薩發序」に「独出曠規、導開横法」とある。

【青蓮】 梵語、Utpala。優鉢羅。借りて仏の眼に喩える。『維摩經』仏国品に「目淨修広如青蓮。」とある。

【白林】 白鶴林のこと。

【通直郎】 通直散騎侍郎のこと。従六位下。

【伊闕県】 河南省洛陽県南七十五里。

【朝散大夫】 従五位下。

【華原県】 陝西省西安府耀州。

## 附 大智禪師義福塔銘

【釋文】

大唐故大□禪師□□□

弟子太僕少卿杜昱撰

禪師諱義福。俗姓姜氏。潞國銅鞮人。曾祖仲遷。隨武陟丞。雁門／令。大父子允・烈考解脫。竝丘園養德。隱居不仕。

禪師體不生之／□神。綱無染之絶韻。爰在悼亂。遊不狎羣。遂更童長。身無擇行。／峻節比夫嵩華。雅量方於溟渤。初好老莊書易之說。亟歷淇澳／漳滏之閒。以非度門。一皆謝絶。齒邁三十。適預縉流。慧音共芝／若同芬。戒相與蓮花比潔。大通之在荆南也。慈導風行。聲如鼓／鍾。應同鳴鶴。乃裹粮修謁。偏袒請命。逮得法要。式是勵精。浹辰／之閒。驀然大悟。三摩隨入。順忍現前。大通印可。密弘付囑。自是／多歷名山。普雨甘露。經行如市。宴坐成林。門下求謁。固嗤三年／之滯。衆中樂聞。常兼五十之喜。則我禪伯之徽業。實亦駿揚于／耿光。及遊步上都。載脂咸洛。法梁是荷。人寶歸尊。有如王公四／累。下逮裨販百族。明發求哀。涕淚勤請。則亦俯授悲誨。朗振圓／音。應器而甌罐必盈。返根則條枚盡治。如摩尼皆隨衆色。入薈／葡不嗅餘香。所可修行。分獲契證。昇堂或落落□出。其餘則滔／滔皆是。前年 與駕東幸。禪師後旋□洛。閉關靜慮。猶□／□言。或趺坐通宵。或冥寂終日。門弟子有觀異相。竊或恠之。知／化緣將終。接衽悲侍。開元廿四年夏五月廿五日。右脇徂逝。春／秋七十九。僧夏□□。

粵六月十有七日。 恩敕追號大智／禪師。秋七月六日甲申。遷神於奉先寺之西原。起塔守護。禮也。／禪師以道分人。運慈濟物。凡所利樂。率先弘溥。其茂德殊行。則／刊在世碑。冥貺神迹。則詳夫外傳。簡茲盡美。略而不書。猶迷變／海之期。示勒開山之記。銘曰。／

闕塞西麓。相縈抱兮。極目南臨。伊汝道兮。永錫大智。神所保兮。／達人□已。豈多藏兮。率由代教。駿發祥兮。于蔭法嗣。道有光兮。／

〔訓読〕

大唐故大□禪師□□□

弟子太僕少卿杜昱撰

禪師諱は義福。俗姓は姜氏。潞国銅鞮の人なり。曾祖仲遷は隋の武陟丞、雁門令。大父の子允、烈考の解脫は、並びに丘園に徳を養い、隱居して仕えず。禪師は不生の□神を体し、無染の絶韻を綱べ、爰に悼亂にありて、遊びて群に狎

れず。遂に童長を更め、身に択行なく、峻節は夫の嵩華に比し、雅量は溟渤に方ぶ。初め老莊書易の説を好み、亟しば淇澳漳滏の間を歴るも、度門にあらざるを以て、一に皆な謝絶す。齒三十を邁ぎ、適たま緇流に預かり、慧音は芝若と共に芬を同じうし、戒相は蓮花と潔きを比ぶ。

大通の荆南に在るや、慈導風行、声は鼓鍾の如く、応は鳴鶴に同じ。乃ち糧を褻み修謁し、偏袒して命を請い、法要を逮得し、是れを式つて励精す。浹辰の間、驍然大悟して、三摩に随入し、順忍現前す。大通、印可して密かに弘いに付嘱す。是より多く名山を歴り、普く甘露を雨らし、経行すれば市の如く、宴坐すれば林を成す。門下謁を求むれば、固より三年の滯を嗤い、衆中聞くを樂えば、常に五十の喜を兼ね。則ち我が禅伯の微業は、実に亦た耿光を駿揚す。上都に遊歩し、咸洛に載脂するに及んで、法梁是れ荷い、人宝帰尊す。王公・四累の如きあり、下は禪販百族に逮ぶまで、明発哀を求め、涕淚請を勤むれば、則ち亦た俯して悲誨を授け、朗として円音を振るう。器に応じては甌缶必ず盈ち、根に返りては則ち條枚尽く治し。摩尼の皆な衆色に随い、蒼葡に入りて余香を嗅がざるが如し。修行すべき所は、分に契証を獲、堂に昇れば或いは落落として□出し、其の余は則ち滔滔として皆な是れなり。前年、興駕東に幸し、禅師後に□洛に旋り、関を閉じて静慮す。猶お□□言のごとし。或いは趺坐すること通宵、或いは冥寂すること終日。門弟子、異相を観る有りて、竊かに或いは之を恠しみ、化縁將に終わらんとするを知り、枉に接して悲しみ侍る。開元廿四年夏五月廿五日、右脇して徂逝す。春秋七十九、僧夏□□なり。

粵に六月十有七日、恩勅ありて大智禅師と追号す。秋七月六日甲申、神を奉先寺の西原に遷し、塔を起てて守護す。礼なり。禅師は道を以て人に分かち、慈を運んで物を済う。凡て利樂する所は、率先して弘溥せり。其の茂徳殊行は、則ち刊して世碑に在り、冥貺神迹は、則ち夫の外伝に詳かなり。茲の尽美を簡し、略して書かず。猶お變海の期に迷うも、示して開山の記を勒む。銘に曰く、

闕塞の西麓、相い縈抱し、目を極めて南に臨む、伊汝の道。永に大智を錫うは、神の保つ所、達人□し已れば、豈に

多藏せんや。代教に率由して、祥を駿発し、于に法嗣を蔭んにして、道に光有り。

(山野俊郎)

## 附 唐景賢大師身塔石記

### 〔釋文〕

唐嵩山會善寺故景賢大師身塔石記／左拾遺太山羊揆纂 沙門溫古書／

大師諱景賢。菩提大通法胤也。本姓薛氏。汾陰人。世爲／著族。容貌秀偉。見者肅然。幼而神明。周覽傳記。弱冠投／心大覺。宿好都遣。問道於□陽智寶禪師。師言。法王大／寶。世傳其人。今運鍾江陵玉泉次。一佛出世。亦難遭矣。／則星馳駿邁。而得大通。發言求哀。揮汗成血。大通照彼／精懇。喻以方便。一見悟入。罔然照洗。

屬世議迫隘。遠迹／幽絕。客居巴峽三抗山中。山尋寬。谷□景。豹虎搏噬。毒／癘蒸鬱。而我歲時宴居。初無惱害。豈□爲之守。而神靈／保綏。良可知也。久之。廣大圓極。悉心以獻。大通怡然。克／荷相許。付寶藏。傳明燈。爲不讓矣。時神龍□歲也。／

中宗聞風。詔請內度。法衆仰德。乞留都下。大師／雅尚山林。迫以祈懇。或出或處。存乎利濟。化自南國。被／乎東京。向風靡然。一變於代。蓋三世諸佛。意□法印。妙／極之用。言外之功。不可得而聞也。觀乎萬形蠢蠢於黑／闇。千界熙熙於熱毒。如來有以登大明。灑甘露。雖相示／寂滅。而業遵龍象。則我先佛法身。湛然常住者矣。

始先／祖師達磨。西來歷五葉。而授大通。赫赫大通。濟濟多士。／寂成福藏。爛其□門。同波派流。分景竝照。亦東山之盛／也。

嘻。世相不實。應盡誰留。菩薩知時。示同於物。開元十／一年龍集癸亥歲八月。在嵩山會善道場。現有微疾。沐／浴室

坐。神情儼然。翌日而謝。春秋六十有四。雲山慘毒。庭樹凋摧。矧夫情靈。痛可言也。門人比丘法宣比丘慧／獻比丘敬言比丘慧林等。不勝感戀。奉爲建塔。迢亭絶／赫。出於嵩半。主上追懷震悼。賜書塔額。署曰報／恩。存沒榮幸。山川光燭。廿年。又起身塔於北巖下。永奉／安焉。若其積微成著之勤。乘定發慧之用。堅剛勇猛之／操。大悲廣衍之業。率皆碑版所詳。不復多載也。／開元廿五年歲次乙亥八月十二日建。／

## 〔訓読〕

唐嵩山会善寺故景賢大師身塔石記。左拾遺太山羊揄纂。沙門溫古書。

大師諱は景賢。菩提大通の法胤なり。本姓は薛氏。汾陰の人にして、世々著族爲り。容貌秀偉にして、見る者肅然たり。幼くして神明、伝記を周覽す。弱冠にして心を大覺に投ず。宿好都て遣り、道を□陽の智宝禪師に問う。師言えらく、法王の大宝は、世々その人に伝え、今運は江陵の玉泉に鍾まるの次。一仏の出世するも、亦た遭い難しと。則ち星馳駿邁して、大通を得たり。言を発して哀を求め、汗を揮いて血を成す。大通彼の精懇に照らし、喩すに方便を以てす。一見悟入し、罔然として照洗す。

属々世議迫隘し、迹を幽絶に遠ざけ、巴峽三抗山中に客居す。山に覓を尋ね、谷に景を□。豹虎搏噬し、毒癘蒸鬱す。而も我、歳時に宴居し、初めより悩害無し。豈に□爲之守。神靈の保綏ならんや、良に知る可きなり。之を久しくして、広大円極、心を悉して以て猷ず。大通怡然として、克く荷い相許し、宝蔵を付し、明燈を伝え、譲らざるを爲せり。時に神龍（七〇五／七〇七）□歳なり。

中宗風を聞き、詔して内度せんことを請う。法衆徳を仰ぎ、都下に留まらんことを乞うも、大師雅に山林を尚ぶ。迫るに祈懇を以すれば、或いは出で、或いは処り、利済に存す。化、南国より東京に被り、風に向かいて靡然たりて、代を一変せり。蓋し三世の諸仏、意□の法印なり。妙極の用、言外の功、得て聞く可からざるなり。万形は黒闇に蠢蠢と

して、千界は熱毒に熙熙たるを觀て、如来以て大明に登り、甘露を灑ぐ有り。相は寂滅を示すと雖も、業は龍象に遵うは、則ち我が先仏の法身にして、湛然として常住する者なり。

始め先の祖師達磨、西より來り五葉を歴て、大通に授く。赫赫たる大通、濟濟たる多士。寂として福藏を成す。爛たる其の□門。同波派流し、分景並び照らす。亦た東山の盛なり。

嘻、世相不実にして、応に尽きて誰か留まるべけんや。菩薩は時を知り、物に同じきを示す。開元十一年(七三三)龍集癸亥の歲八月。嵩山会善道場に在りて、微疾を現有す。沐浴宴坐し、神情儼然たり。翌日にして謝す。春秋六十有四。雲山慘毒し、庭樹凋摧す。矧わんや夫の情盡、痛なること言う可けんや。門人比丘法宣・比丘慧巖・比丘敬言・比丘慧林等、感恋に勝えず。奉じて為に塔を建つ。迢亭絶赫として、嵩の半ばに出づ。主上追懷震悼し、書を塔額に賜いて、署して報恩と曰う。存没榮幸し、山川光燭す。廿年 又身塔を北巖の下に起て、永く焉に奉安す。其れ積微成著の勤、乘定発慧の用、堅剛勇猛の操、大悲広衍の業の若きは、率ね皆碑版の詳らかにする所にして、復た多くは載せず。

開元廿五年(七三七) 歲次乙亥八月十二日建つ。

(佐藤義寛)

#### 四 實際寺故寺主懷惲奉敕贈隆闡大法師碑銘并序

##### 〔解題〕

碑主懷惲(六三九―七〇一)は永昌元年(六八九)に實際寺の寺主となり、大足元年(七〇二)に遷化し、神龍元年(七〇五)に隆闡法師を追贈せられた。碑は天寶二年(七四三)に大溫国寺主思莊をはじめとする弟子たちが建てたものである。實際寺は景龍元年(七〇七)に溫国寺と改名されている。碑文を内容上六段に分け、その概要を記せば次のようにな

る。釈尊成道後、末法の世に釈利防が中国に訪れ、後漢明帝の時に初めて仏教を崇び、後に青眸、白足などの僧が訪れて教えをひらいた(第一段)。隆闡法師懷惲は南陽張氏に属し、遠祖安の時に長安に移る。先祖のなかには要職を占める者もあった。また法師には幼少より仏道に帰依する行いがあった(第二段)。高宗の時、法師は西明寺で剃髪し、そこで善導より教えを受けた。善導没後、法師は師のために靈塔を建て、また大窣堵波塔を築いた(第三段)。則天武后即位後、法師は實際寺の寺主となり教化につとめる。法師は常に『觀無量壽經』『賢護經』『阿彌陀經』を講じ、一心に阿彌陀仏を專念し、また、堂内に阿彌陀仏、觀音、勢至などの像を建てた(第四段)。その法師も六十二歳で遷化し、後に隆闡法師を追贈せられた(第五段)。そして、最後に銘を添えている(第六段)。ところで、この碑文が懷惲よりもその師善導の事跡を知る資料として貴重なことは周知のとおりである。たとえば、碑文に「親しく三昧を証せる大徳善導闡梨」とあるのは、善導が称名念仏を唱えたことを言うもので、懷惲はその師に倣って「一心に阿彌陀仏を專念」する。この他力本願の教えによって、曇鸞、道綽と相承された浄土教が凡夫救済の方向へ発展していくことになるのである。また、懷惲が「浄土堂」造営の際に「堂内に阿彌陀仏及び觀音、勢至を造」ったのは、觀音菩薩と勢至菩薩を阿彌陀仏とともに讃える阿彌陀三尊思想を示すものであるが、この思想は師善導の『往生礼讃』に見えるから、これもまた懷惲が師の教えに従ったものと考えてよい。ただ、諸氏が指摘するように碑文には問題点や疑問の箇所が少なくない。たとえば、筆者が拠った碑林の拓本には碑題の下に「懷惲及書」の四字がある。『中国浄土教論集』所載「隆闡法師碑考察文」は「及」の字を『左伝』『与謀曰及』『後漢書』『張儉等八人為八及』に拠り、「学ぶ」「標準」などの意味だとし、思莊をはじめとする懷惲の弟子たちが師を顕彰するために師の書法に倣って書いたと推測しているが、これはいささか強引な結論である。ただ、碑文の撰者については、『金薤琳琅』が「唐實際寺主懷惲碑、撰人の姓名を書さず。碑中に弟子思莊敬想清徽、勒茲玄炎(琰)の語有るを觀れば、則ち碑は乃ち惲の徒の撰する所」と述べ、『金石文字記』にも同様の指摘があるように、これは思莊等弟子たちと考えてよい。『王弼州山人統稿』が「隆闡法師碑、僧懷惲の撰及び書」とするのは誤りであ

る。よって、「懷惲及書」の四字は後人の妄増によるものと思われるが、そこに如何なる意図があつたかは分からない。

(今場正美)

〔釋文〕

大唐實際寺故寺主懷惲奉敕贈隆闡大法師碑銘并序

懷惲及書

昔吾師因地求真。衆魔紛嬈。果到成佛。龍天捧圍。自作鎮靈山。法躬靡易。告滅雙樹。示跡倫凡。微言不傳。慧燭潛照。屆夫歲邁千秋。時淹五濁。欲海騰沸。邪山紛糾。於是釋／防東逝。爰稱兆應。漢夢四通。方崇像法。或青眸接軫(軫)。競扇玄風。或白足相趨(趨)。爭開佛日。至欲繼前賢之令軌。爲後進之康衢。照燭重昏。慈舟苦派。人能弘道。斯之謂歟。

法師。諱懷惲。俗張姓。南陽人也。遠祖因宦播遷京兆。廿一代祖安。晉丞相。襲爵鴻臚公。高祖融。字(守)黃門郎。遷太子庶子。祖英。唐解褐太常太祝。襲爵天平公。轉吳王祭酒。握蘭／奏位。清陪雅列。法師聰敏。爲其性相。慈善。資其風骨。母常山夫人。樂姓。降胎之月。不味羶腥。載誕之辰。情欣禁戒。暨年登廿歲。特異諸童。或焚葉爲香。或聚沙爲塔。雖飛軒／繡轂。未嘗留步。月宇香樓。怡然忘返。／

高宗天皇大帝。乘軋(乾)撫運。出震披圖。虛己求賢。明啟待士。總章元載。夢覩法師。條降綸言。遠令虔辟。於是臨丹檻。迹(邇)青蒲。廣獻眞誠。特蒙褒讚。／帝乃親授朱紱。令處鳳池之榮。師乃固請緇衣。願託鸚林之地。

奉／敕於西明剎落。善來忽唱。惡業疑鎖。既挂三衣。俄陪四衆。翹勤□積。思五分而非遙。精苦逾深。想三祇而未遠。時有親證三昧大德善導闍梨。慈樹森疎。悲花照灼。情祛□／漏。擁藤井於蓮臺。穀(穀)化無涯。駢鐵圍於寶國。既聞盛烈。雅締師資。祈解脫規。發菩提願。一承妙旨。十有餘齡。祕偈眞乘。親蒙付屬。自惟薄祐。師資早亶(喪)。想遺烈而崩心。願餘／恩而雨面。爰思宅地(兆)。式建墳塋。遂於鳳城南神和原崇靈塔也。其地前終峯之南鎮。後 帝城之北

里。哥鍾沸出。移上界於陰門。泉流激灑。北連河於陽面。仍於塔側。／廣構伽藍。莫不堂殿崢嶸。遠摸忉利。樓臺岌嶭。直寫祇園。神木靈草。淩歲寒而獨秀。葉暗花明。逾嚴霜而靡萃。豈直風高氣爽。聲聞進道之場。故亦臨水面山。菩薩全眞之／地。

又於寺院造大窰堵波塔。周廻二百步。直上一十三級。或□星揆務。或候日裁規。得天帝芳蹤。有龍王之祕跡。重重佛事。窮鷲嶺之分身。種種莊嚴。盡崑丘之異寶。但以／至誠多感。能事冥資。故能遠降 宸衷。令寶舍利。計千餘粒。加以七珎函筭。隨此勝緣。百寶幡花。令興供養。／

則天大聖皇后。承九玄之眷命。躡三聖之休期。猶尚志想金園。情欣勝躡。或頻臨淨刹。傾海國之名珎。或屢訪炎□。捨河宮之祕寶。法師誠盈而散。竝入擅軀。法師業行高／□。利益繁多。故得名振 九重。芳盈四部。奉永昌元年

敕。徵法師爲寺主。於是綱紀僧徒。規模釋族。緇門濟濟。戒德峻而彌堅。紺宇誦誦。常住豐而更實。猶是／才稱物寶。道爲時尊。知與不知。仰醍醐於句偈。識與不識。詢法乳於波瀾。

法師以慈誘內懷。敷揚外積。冀傳聖旨。用酬來望。每講觀經・賢護・彌陀等經。各數十遍。夫我域者。／扇激風火。嬰抱結漏。系諸生。止無常之短期。研平事。眞攀不亟之虛朕。若不乘佛願力。託質淨方。則恐淪溺長往。清昇永隔。於是言論之際。懇勸時衆。四儀之中。一心專念。／阿彌陀佛。願乘此勝因。□生淨域。又以般若神呪。能令速證菩提。彌陀佛名。亦望橫超惡趣。諸餘妙典。雖竝積心臺。於此勝緣。頗偏遊智府。嘗誦大般若呪。向盈卅萬。又誦／彌陀眞偈。十萬餘遍。理復使精。眞厥想念。雖微而必就。二三千行功。唐捐而靡得。豈直諸佛現前。神人捧錫而已矣。

師爲諸重擔。攝尔(爾)羣生。舉洪灼於耶(邪)山。掉(掉)寶航於見海。／悲夫娑婆國中。人多弊惡。雖復珎臺寶界。因勝侶而歸心。至欲逸翥遐征。藉良緣而克進。敢憑此義。爰發誠心。於是廣勸有緣。奉爲 九重萬乘。四生六趣。造淨土／堂一所。莫不虬棟淩虛。虹梁架迴(迴)。丹楹絕日。青瑣延風。無春而反井舒花。不暝而重簷積霧。於是神螭戾趾。遠鎮瓊階。寶鳳來儀。還陪桂戶。彫薨畫拱之異。窮造化之規模。／圓瑄方鏡之奇。極人天之巧妙。又於堂內造阿彌陀

佛及觀音・勢至。又造織成像。并餘功德。竝相好奇特。顏容湛粹。山豪演妙。若照三千。海目摘華。如觀百億。或曰(因)繪命采。／有慈氏之全身。或散札馳芳。得憂填之逸思。何獨如來自在。疑降上界之魔。故亦菩薩懃(懃)怡。似救下方之苦。夫以宅生者心。心勞則生喪。栖神者志。志擾則神亡。然菩薩以／濟物捐軀。上善以遺形徇節。法師情存拯救。式奉殷繁。汲引雖曰忘懷。形質焉能靡累。於是忽嬰風癘。病與時侵。靈藥弗痊。胚器俄逝。豈夫八林齊白。我佛稱於寂滅。梁木／其壞。吾師等於死生。以大足元年十月廿二日神遷。春秋六十有二。臨終之際。正念無虧。顏色怡悅。似有瞻矚。北首面西。奄然而化。

悲夫烈烈歲陰。蒼蒼天色。軋(軋)兮何負。殲／我惟良。業也何孤。空(喪)茲賢哲。豈直悲盈四部。嗟鹿苑之荒涼。抑亦哀悼兩宮。痛蜂臺之間(闕)寐(寂)。猶是俯迴 天睟(睟)。載紆仙豪。遠降恩波。爰加 制贈。奉神龍元年／

救。實際寺主懷惻。示居三界。遠離六塵。等心境於虛空。涅槃枯於物我。棟梁紺宇。領袖緇徒。包杖錫之規模。躡乘扈之懿躅。雖已歸寐(寂)滅。無待於哀(喪)揚。然寵治友于。無忘(忘)於／禪禮。可贈隆闡大法師。主者施行。上人以至德事脩。良因累著。故得天降成烈。用讚芳規。追遠慎終。生榮死贈。足可光輝淨刹(刹)。歷塵芥而長存。旌貴玄門。共河山而永久。弟／子大溫國寺主思莊等。竝攀師(號)積慮。哀慕居懷。嗟覆護而無時。仰音顏而靡日。猶恐居諸易遠。泝(溯)善湮沉。敬想清徽。勒茲玄(跋)詞曰。／

娑婆種覺。賢劫能人。三祇彌妄。五分祈眞。卽相離相。非身是身。猶施慧棧。廣濟迷津。其一(上平十七眞)。十方化備。雙林滅度。三界空虛。四生哀慕。正教既隱。微言遽斲。式啓先哲。用資後悟。／其二(去聲十一暮)。芳猷廣被。至烈彌殷。青眸演聖。白足呈眞。遠導芻芥。遐宣墨塵。玄門不絕。代有其人。其三(上平十七眞)(殷：上平二十一欣)。猗歟令德。遠嗣前英。聲高四部。譽重三明。慈周有識。智契無生。法雲葉落。道樹滋／榮。其四(下平十二庚)(豈(圖)宿殃。師資遽亡。軋兮何負。殲我惟良。徒嗟授几。空念傳香。非夫勝緣。孰答恩光。其五(下平十陽)(光：下平十一唐)。邈矣荆野。慈顏曠側。敬發誠心。爰憑淨域。眞容湛粹。樓臺歸疑。希此善根。遠酬／明德。其六(入聲二十四職)(德：入聲

二十五徳)。

天寶二年歲次癸未十二月景寅朔十一日景子建

(1)『萃編』作涼。(2)『萃編』作航。

# I 伝灯の歴史

## 〔訓読〕

大唐実際寺の故寺主懷憚、勅を奉じて隆闡<sup>えん</sup>大法師を贈らるるの碑銘並びに序

昔、吾が師は因地に真を求め、衆魔紛嬈するも、果到りて成仏し、龍天捧げ囲む。自ら靈山に鎮を作してより、法躬易はること靡し。双樹に告滅し、跡を倫凡に示すに、微言は伝はらず、慧燭は照を潛<sup>す</sup>ます。夫の歳の千秋を邁<sup>す</sup>ぎ、時は五濁に淹はれ、欲海は騰沸し、邪山は紛糾するに届り、是に於いて积防東逝し、爰<sup>こゝ</sup>に兆応に称ふ。漢夢西通して、方めて像法を崇ぶ。或は青眸軫を接して、競ひて玄風を扇ぎ、或は白足相趨きて、争ひて仏日を開く。前賢の令軌を継ぎ、後進の康衢と為らんことを欲するに至り、重昏を照燭して、苦派を慈舟す。「人能く道を弘む」とは、斯れ之の謂か。

## 〔語釈〕

【実際寺】 陕西省西安府にある寺。永昌元年(六八九)、善導の弟子隆闡法師懷憚がここに住した。(『金石萃編』八十六・十八中)

【寺主】 上座・寺主・都維那の三綱の一。寺衆を綱紀する役目をもつ。

【吾師】 『中国浄土教論集』(以下、『論集』と略称す)は、积尊を指すとす。今、これに従う。

【衆魔】 仏陀が成道する時に魔王波旬が四女を遣わしてなやま

せたとする。『普曜経』降魔品「爾時波旬告其四女、一名欲妃、二名悦彼、三名快観、四名見従。汝詣仏樹、惑乱菩薩、嗟歎愛欲之徳、壞其清浄之行。」(大三・四八三)

【龍天】 八部衆(仏の説法の会座に列して法を聴聞し、又法を守護するといふ八部の異類。天竜八部、竜神八部の略)の中の、天衆と龍衆。

【慧燭】 教法を明灯・燭に喩えたもの。

【积防】 室利房。又积利房。(『歴代三寶紀』太四十九・二十三下)

【漢夢西通】『魏書』 積老志「後孝明帝夜夢金人、項有日光、飛行殿庭、乃訪羣臣、傳毅始以仏対。帝遣郎中蔡愔博士弟子秦景等使於天竺、写浮屠遺範。」

【青眸】『高僧伝』 卷二「卑摩羅叉、此云無垢眼、闕賓人。……

先在龜法、弘闡律藏、四方學者、競往師之、鳩摩羅什時亦預焉。及龜茲陷沒、乃避地焉。頃之、聞什在長安大弘經藏、又欲使昆勝品、復治東國、於是杖錫流沙、昌陰東入。以偽秦弘始八年（四〇六）達自閩中、什以師礼敬待、又亦遠遇欣然。及羅什棄世、又乃出遊閩左、逗於壽春、止石澗寺、律衆雲聚、盛闢毘尼。……

又為人眼青、時人亦号為青眼律師。」（大五十・三三三中）

【接軫】車をつらねる。張衡・西京賦「冠帶交錯、方輶接軫。（注）説文曰、軫、車後橫木也。」（『文選』 卷二）

【玄風】沈約『宋書』 卷六十七・謝靈運伝論「有晋中興、玄風独振、為学窮於柱下、博物止乎七篇。馳騁文辭、義单乎此。」

【白足】『高僧伝』 卷十「釈曇始、閩中人。……晋孝武太元之末、

## II 家系と童年時代

### 【訓読】

法師、諱は懷惲、俗は張姓、南陽の人なり。遠祖は宦に因りて京兆に播遷す。廿一代の祖安は、晋の丞相、鴻臚公を襲爵す。高祖の融は、守黄門郎。太子庶子に遷る。祖の英は、唐のとき太常太祝に解褐し、天平公を襲爵し、呉王の祭酒に転ず。奏位を握蘭し、雅列に清陪す。法師は聡敏、其の性相たり、慈善は、其の風骨に資す。母は常山夫人、楽姓。

齋經律數十部、往遼東宣化、顯授三乘、立以帰戒、蓋高句麗聞道之始也。……始足白於面、雖跣涉泥水、未嘗沾涅、天下咸称白足和上。」（大五十・三九二中）

【仏日】仏法は日（太陽）に喩えられる。『智度論』一「仏出悉開解、其明如日照。」（大二十五・五十八下）、『金光明經』懺悔品「仏日大悲、滅一切闇。」（大十六・三六六下）

【令軌】すぐれた法、きまり。『魏志』 卷二十五・高堂隆伝「悼皇后崩。天作淫雨、冀州水出、漂没民物。隆上疏切諫曰、……爰及末葉、闇君荒主、不崇先王之令軌、不納正士之直言。」

【康衢】四通八達の道。ここでは道しるべの意か。『列子』 仲尼「堯乃微服游於康衢。」

【苦派】度る（解決する）ことが難しい苦を川の流れに喩えたもの。『法句経』 上・明哲品「世皆没淵、鮮剋度岸。」（大四・五六四上）

降胎の月、羶腥を味はず。載誕の辰、情は禁戒を欣ぶ。年の廿歳に登るに暨んで、特り諸童に異なる。或は葉を焚きて香と為し、或は沙を聚めて塔と為す。飛軒繡轂と雖も、未だ嘗て歩を留めず。月宇香楼、怡然として返るを忘る。

〔語釈〕

【南陽】 河南省。

【鴻臚公】 『隋書』百官志中「鴻臚寺、掌蕃客朝会、吉凶弔祭。

統典客、典寺、司儀等署令丞。」

【黃門郎】 皇帝に侍従し、詔命を伝達する。唐初、東台侍郎、鸞

台侍郎などと改称される。天宝元年（七四二）に門下侍郎と改名される。『唐六典』八「門下省。黃門侍郎二人、正四品上、……

黃門侍郎掌貳侍中之職。」

【太子庶子】 庶子は太子の侍従官の一つ。『唐六典』二十六「太子左春坊、左庶子二人、正四品上。太子右春坊、右庶子二人、正四品下。」

【太常太祝】 祭祀祈禱の事を掌る。『唐六典』十四「太常寺、太祝三人、正九品上。」

【天平公】 未詳。『論集』は、唐初の鄆州（山東省）の公爵とする。

【握蘭】 天子の側近の職を務める。漢・応劭『漢官儀』卷上「尚書郎（握蘭含香、趨走丹墀奏事。」

【風骨】 人品。『南史』宋本紀・上一「宋高祖武皇帝諱裕、……及長、雄傑有大度、身長七尺六寸、風骨奇偉、不事廉隅小節、奉繼母以孝聞。」

【廿歳】 廿（卯）は、髪を總角（あげまき）に結うこと。幼年。

『詩』齊風・甫田「婉兮變兮、總角卯兮、未幾見兮、突而弁兮。」

【或焚葉為香、或聚沙為塔】 『妙法蓮華經』方便品「若於曠野中、積土成仏廟、乃至童子戲、聚沙為仏塔。」（大九・八下）

【飛軒】 速い車。曹植・七啓「飛軒電逝、獸隨輪輶。」（注）李周

翰曰、飛軒、輕車也。」（『文選』卷三十四）

【繡轂】 美しく飾った車。繡軸。江淹・別賦「至若龍馬銀鞍、朱軒繡軸、帳飲東都、送客金谷。」（『文選』卷十六）

【月宇】 寺宇。仏寺。錢起・柏崖老人詩「長男棲月宇、少女炫霓裳。」（『全唐詩』卷二三八）

【香楼】 寺院の中の楼閣。梁武帝・遊鍾山大愛敬寺詩「長途弘翠微、香楼問紫烟。」（『梁武帝集』）

### III 出家の決意

#### 〔訓読〕

高宗天皇大帝、乾に乗り運を撫し、震より出でて図を披く。己を虚しくして賢を求め、明敏して士を待つ。總章元載、夢に法師を覩、倏ち綸言を降して、遠く虔んで辟かしむ。是に於いて丹檻に臨み、青蒲に迄づき、広く真誠を献じて、特り褒讃を蒙る。帝は乃ち朱紱を親授して、鳳池の榮に処らしめんとす。師は乃ち固く縑衣を請ひて、鸚林の地に託せんことを願ふ。

#### 〔語釈〕

【高宗】 太宗の第九子。在位六四九～六八三。

【乗乾】 天子の位につくこと。『左伝』昭公三十二年「在易卦、雷乘乾曰大壮。（杜預注）乾下震上、大壮。震在乾上、故曰雷乘乾。」「周易」説卦「乾、天也。故称乎父、坤、地也、故称乎母、……乾为天、為圓、為君、為父、為玉、……」。

【撫運】 時運にかなう。劉禹錫・為京兆李尹賀遷獻懿二祖表「伏以太祖景皇帝膺期撫運、啓封於唐。」（『劉禹錫箋証』卷十三）

【出震】 即位する。『周易』説卦「帝出乎震、……万物出乎震、震、東方也。」徐陵・勅進梁元帝表「伏惟陛下出震等於勛華、鳴謙同於旦奭。」（『徐僕射集』）

【明敏】 明揚。選拔、挙用する。『梁書』処士伝（庾詡）普通

中、詔曰、明敏振滞、為政所先、旌賢求士、夢符斯急、……（庾詡可黃門侍郎、……詡称疾不赴。）」

【總章元載】 西紀六六八年。

【青蒲】 『漢書』史丹伝「丹以親密臣得侍視疾、候上間独寢時、丹直入臥内、頓首伏青蒲上、涕泣言。（注）服虔曰、青緣蒲席也。応劭曰、以青規地曰青蒲、自非皇后不得至此。」

【鳳池】 鳳凰池。禁苑中の池沼。故に鳳池の榮とは、天子のそばに身を置く榮誉か。謝朓・直中書省詩「茲言翔鳳池、鳴珮多清響」（『文選』卷三十）の「鳳池」は中書省を指す。

【鸚林】 寺院のある場所。王勃・彭州九隴峯龍懷寺碑「繡帶綖裾、指鸚林而驚歎。」

## IV 出家後——善導の付法——

## 〔訓読〕

勅を奉じて西明に於て剃落す。善来忽ち唱ふれば、惡業は疑鎖し、既に三衣を掛け、俄に四衆に陪す。翹勤□に積み、五分を思ひて遙かなるにあらず。精苦逾々深く、三祇を想ひて未だ遠からず。時に親しく三昧を証せる大徳善導闍梨有り。慈樹森疎として、悲花照灼たり。情は□（有？）漏を祛ひ、藤井を蓮台より擁ぐ。叡は無涯を化し、鉄圀を宝国より駟る。既に盛烈を聞き、雅より師資を締び、解脱の規を祈り、菩提の願を発す。一たび妙旨を承けてより、十有余齡、秘偈真乘、親しく付属を蒙る。自ら惟ふに薄祐にして、師資早に喪ふ。遺烈を想ひて心を崩し、余恩を顧みて面に雨す。爰に宅兆を思ひ、式て墳塋を建つ。遂に鳳城の南、神和原に於いて靈塔を崇くするなり。其の地、前は終峯の南鎮、後は帝城の北里なり。哥鍾沸出して、上界を陰門に移し、泉流激灑して、連河を陽面に北す。仍りて塔側に於て、広く伽藍を構ふ。堂殿崢嶸として、遠く忉利を摸し、樓台岌嶭として、直く祇園を写さざるはなし。神木靈草、歳寒を凌いで独り秀で、葉暗花明、嚴霜を逾えて萃むなし。豈に直だ風高く気爽にして、声聞進道の場のみならんや。故に亦た水に臨み山に面ひて、菩薩全真の地なり。

## 〔語釈〕

【西明】 長安城内の西明寺。高宗の勅により、顯慶三年（六五八）に開創。武帝の廢仏の際に破却された。（『論集』一一八）

【翹勤】 翹勤。切実に願う。潘岳・西征賦「徘徊鄼鎬、如渴如飢、心翹慙以仰止、不加敬而自祇。」（『文選』卷十）

【大徳善導闍梨】 中国浄土教の祖師、善導大師。隋大業九年（六

一三）→唐永隆二年（六八二）。（『論集』一九・二〇）

【森疎】 樹木が繁茂するさま。陶淵明・庚子歲五月中從都還阻風于規林詩「高莽眇無界、夏木独森疎。」

【照灼】 燦然とひかりかがやく。謝靈運・魏太子鄴中集詩・魏太子「照灼爛霄漢、遙裔起長津。」（『文選』卷三十）

【藤井】愛欲の比喻か。『大毘婆沙論』卷九十四「復次唯無學位

断如藤愛、離諸繫縛。」(大二十七・四八六下)

【薄祐】神仏の加護が乏しい。不幸なこと。『後漢書』皇后紀上・

和熹鄧皇后「詔曰、朕以無德、託母天下、而薄祐不天、早離大憂。」

【宅兆】墓地。『孝經』喪親「ト其宅兆而安措之。」(注)宅、墓穴

## V 大宰堵波塔の造立

### 【訓読】

又た寺院に於いて大宰堵波塔を造る。周廻二百歩、直上一十三級。或は星を□(瞻?)て務めを揆り、或は日を候ひて規を裁<sup>はか</sup>る。天帝の芳蹤を得、龍王の祕跡有り。重重たる仏事は、鷲嶺の分身を窮め、種種たる莊嚴は、崑丘の異宝を尽くす。但だ至誠は多く感じ、能事は冥資するを以ての故に、能く遠く宸衷を降し、舍利を資<sup>もた</sup>らしめて、千余粒を計ふ。加ふるに以て七珎の函筭、此の勝縁に随ひ、百宝の幡花、供養を興さしむ。

### 【語釈】

【□星揆務】□には恐らく「瞻」が入ると思われる。瞻星揆地。

上は天候を観、下は地形を察す。陸倕・石闕銘「陳圭置臬、瞻

星揆地、興復表門、草創華闕。」(『文選』卷五十六)

也。兆、塋域也。」

【鳳城南神和原】鳳城は、都の美称。長安を指す。沈佺期・奉和

立春遊苑迎春詩「歌吹銜思婦路絶、棲鳥半下鳳城来。」(『全唐詩』卷九十六)

【連河】希連禪河の略。仏がこの河畔の菩提樹下に於いて成道す。

【莊嚴】寺塔を建て、仏像を裝飾す。『洛陽伽藍記』明懸尼寺「有

三層塔一所、未加莊嚴。」

## VI 實際寺の寺主となる

## 〔訓読〕

則天大聖皇后、九玄の眷命を承け、三聖の休期を躡む。猶尚志は金園を想ひ、情は勝躡を欣ぶ。或は頻りに淨利に臨んで、海国の名祇を傾け、或は屢々炎□を訪ひて、河宮の秘宝を捨つ。法師盈を誡めて散じ、並びに檀妃（那？）に入る。法師は業行高□、利益繁多なり。故に名の九重に振ひ、芳の四部に盈つるを得たり。永昌元年の勅を奉じ、法師を徴して寺主と為さしむ。是に於て僧徒を綱紀し、釈族を規摸す。緇門は済済、戒徳峻くして弥々堅し。紺宇は誂誂、常住豊にして更に実つ。猶ほ是れ才は物の宝に称ひ、道は時の尊と為れり。知と不知と、醍醐を句偈に仰ぎ、識と不識と、法乳を波瀾に詢る。

## 〔語釈〕

【則天大聖皇后】『旧唐書』則天皇后紀「神龍元年（七〇五）春正月戊申、皇帝上尊号曰則天大聖皇帝。冬十一月壬寅、則天将大漸、遣制耐廟、歸陵、令去帝号、称則天大聖皇后。」

【九玄】九天。『抱朴子』任命「然不能凌扶揺以高竦、揚清耀於九玄。」

【眷命】寵愛を受け、重任を与えられる。『書』大禹謨「皇天眷命、奄有四海、為天下君。」

【三聖】『旧唐書』礼儀志に載す垂拱四年（六八八）の詔に「來年正月一日、可於明堂宗祀三聖、以配上帝。」とあり、「三聖」とは唐の三皇帝（高祖、太宗、高宗）を指す。

【休期】すばらしい時期。徐陵・陳公九錫詔「昔在休期、早隆朝寄。」（『徐僕射集』）

【金園】淨土。李嶠・為朝集使等上尊号表「攀玉署駕鴻之議、雜金園龍象之謀。」（『全唐文』卷二四三）

【勝躡】仏法を指す。

【淨利】寺院。沈約・内典序「聖迹彪炳、日煥千閭浮、神光隆離、星繁千淨利。」（『広弘明集』卷十九・大五十二・二三二上）

【河宮】神話伝説中の河神の住む宮殿。庾肩吾・乱後経夏禹廟詩「侵雲似天闕、照水類河宮。」（『芸文類聚』卷三十八・宗廟）

【紺宇】紺園。仏寺の別称。王勃・益州德陽県善寂寺碑「朱軒夕

朗、似游明月之宮、紺宇晨融、若对流霞之闕。」(『集注』十七)

【詠詠】『詩』周南・龜斬「龜斬羽、詠詠兮。(伝)詠詠、衆多也。」

## VII 弘教と念仏

### 【訓詁】

法師は慈誘を内に懷き、敷揚を外に積むを以て、聖旨を伝へて、用て来望に酬いんことを冀ふ。毎に観經・賢護・弥陀等の經を講ずること、各々数十遍なり。夫れ我が域は、風火を扇激し、結漏を嬰抱す。諸れを生に糸くるに、無常の短期に止まり、事を研めて、真に亟かならざるの虚朕に攀づ。若し仏の願力に乘じ、質を淨方に託せずんば、則ち恐らくは淪溺<sup>としへ</sup>長に往き、清昇永く隔てられん。是に於いて言論の際、懇に時衆に勧め、四儀の中、一心に阿弥陀仏を専念す。願はくは此の勝因に乘じ、□の淨域に生ぜしめんことを。又た般若神呪を以て、能く速かに菩提を証せしめ、弥陀の仏名もて、亦た惡趣を横超せんことを望む。諸余の妙典は、並びに心台を積むと雖も、此の勝縁に於いて、頗る智府に偏遊す。嘗て大般若呪を誦し、向に卅方に盈つ。又た弥陀の真偈を誦すること、十万余遍。理として復た精を使ひ、厥の想念を真にすれば、微なりと雖も必ず就らん。行功を二三すれば、唐捐して得る靡し。豈に直だ諸仏の現前し、神人の錫を捧ずるのみならんや。

### 【語釈】

【敷揚】 広く伝える。『後漢書』張綱伝「遂奏曰、……不能敷揚

五教、翼讀日月。」

【来望】 後のすぐれた人々。弟子を指す。

【観經・賢護・弥陀等經】 『仏説観無量壽經』『大方等大集賢護經』

『仏説阿弥陀經』

【風火・結漏】 ともに煩惱を指す。

【虚朕】 『莊子』 庖丁王「体尽无窮、而遊无朕。」

【時衆】 僧俗の五衆の総称。『観教玄義分』一「道俗時衆等、各発無上心。」(大三十七・二四五下)

【勝因】 殊勝の善因。『仏説無常經』「勝因生善道、惡業隨泥犁。」

(大十七・七四六上)

【神呪】 神呪。陀羅尼なり。神秘の呪語。『大般涅槃經』壽命品

一「我已受汝所說神呪、為欲安樂一切衆生四部衆故。」(大十二・

三七〇中)

【智府】 心を指す。楊炯・後周明威將軍梁公神道碑「靈台遠覽、

与霜月而齊明。智府弘深、共烟波而等曠。」(『楊盈川集』卷六)

【二三】 專一ならざるさま。『書』威有一德「德惟一、動罔不吉、

德二三、動罔不凶。」(伝)二三、言不一。」

【唐捐】 むだに費やす。『妙法蓮華經』觀世音菩薩普門品「若有

衆生、恭敬禮拜觀世音菩薩、福不唐捐。」(大九・五十七上)

## VIII 浄土堂の造立

### 【訓読】

師は諸の重擔を為し、爾の羣生を撰む。洪灼を邪山に挙げ、宝航を見海に棹さす。悲しいかな娑婆國中、人弊惡多き。復た瑠台宝界、勝侶に因りて心を帰すと雖も、逸翥して遐かに征くを欲するに至りては、良縁に藉りて克く進む。敢て此の義に憑り、爰に誠心を発す。是に於て広く有縁に勧め、奉じて九重万乗、四生六趣の為に、浄土堂一所を造る。虬棟の虚を凌ぎ、虹梁の廻かなるに架せざるは莫し。丹楹日に絶く、青瑣風を延く。春無くして反井花を舒べ、暝からずして重簷霧を積む。是に於て神螭戾趾して、遠く瓊階を鎮め、宝鳳来儀して、還た桂戸に陪ふ。彫甍画拱の異は、造化の規模を窮め、円瑱方鏡の奇は、人天の巧妙を極む。又た堂内に阿弥陀仏及び觀音・勢至を造り、又た織成像、並びに余功德を造る。並びに相好は奇特、顔容は湛粹たり。山豪妙を演べて、三千を照らすが如く、海目華を擣りて、百億を觀るが若し。或は繪に因り采を命じて、慈氏の全身有り。或は札を散じ芳を馳せて、憂填の逸思を得たり。何ぞ独り如来の自在のみ、上界の魔を降すに疑ん。故に亦た菩薩の熙怡も、下方の苦を救ふに似たり。

### 【語釈】

【師為諸重擔、撰爾羣生】 『無量壽經』上「荷負群生、為之重擔。」

(大十二・二六六中)

【洪灼】衆生を濟度する智の灯。

【宝航】見海に漂泊する者を悟りの彼岸に渡す船。『大方広華嚴經（四十華嚴）』卷三十五「諸仁者、此大丈夫、為被四流漂泊者、造大法船、為被見泥没溺者、立大法橋。」（大十・八二四中）

【見海】煩惱の海。見は誤った見解。邪見。

【虬棟・虹梁】王筠・上太極殿表「繡栴鏤檻、延曜光暉、虬柱虹梁、杳冥雲霧。」（『芸文類聚』卷六十二）

【凌虛】天にとどくこと。曹植・節遊賦「建三台於前処、飄飛陸以凌虛。」（『芸文類聚』卷二十八）

【青瑣】青瑣。宮廷の窓にほどこされた連環状の模様。後に、貴族の邸宅や寺院にもこうした装飾をするようになる。『漢書』元后伝「曲陽侯根驕奢僭上、赤墀青瑣。（師古注）青瑣者、刻為連環文、而青塗之也。」『洛陽伽藍記』卷一・永寧寺「僧房樓觀一千余間、雕梁粉壁、青瑣綺疏、難得而言。」

【戻趾】戻止。いたる。『詩』魯頌・泮水「魯侯戻止。（伝）戻来。止、至也。」

【来儀】おとずれる。やってくる。『書』益稷「簫韶九成、鳳皇来儀。」

## IX 入寂

### 〔訓読〕

夫れ生を宅する者は心なるを以て、心勞すれば則ち生喪はる。神を栖せる者は志なるをもつて、志擾るれば則ち神亡ぶ。

【織成像】金糸で織り上げた仏像。『洛陽伽藍記』卷一・永寧寺「浮図北有仏殿一所。形如太極殿、中有丈八金像一軀、……、金織成像五軀、……。」

【山豪海目】『論集』一三七は、「眉間の白毫は須弥山のごとし」という『仏說觀無量壽經』卷九・真身觀文から取ったものか、という。『仏說觀無量壽經』卷九・真身觀文「眉間白毫（豪）右旋宛轉如五須弥山。仏眼清淨如四大海水、清白分明、身諸毛孔演出光明、如須弥山。彼仏円光如百億三千大千世界。」（大十二・三四三中）又、賛に「眉間白毫五須弥、紺眼弘証四大海。光明演出書毛孔、一孔遍含諸大千。」とある。

【散札】憂煩が牛頭栴檀を以て造った如来像のことか？（栴檀は香木で、牛頭栴檀が最も香気が高い）

【疑】似る。『列子』黄帝「用志不分、乃疑於神。」

【自在】心の欲するままに何事でも自由になして礙のないこと。

仏・菩薩に具わる無礙なる境地。

【熙怡】楽しく心とらぐ。蔡邕・故太尉喬公廟碑「見公容貌、聞公声音、莫不熙怡悅懌。」（『蔡中郎文集』卷一）

然れば菩薩は物を済ふを以て軀を捐て、上善は形を遺るるを以て節に徇ふ。法師は情拯救に存し、式て奉ずること殷繁。汲引して懷を忘ると曰ふと雖も、形質焉ぞ能く累靡からんや。是に於いて忽ち風瘵に嬰り、病時と与に侵す。靈藥痊えず、胚器俄に逝く。豈に夫れ八林齊しく白く、我が仏寂滅に称ひ、梁木其れ壞れ、吾師死生を等しくせんや。大足元年十月廿二日を以て神遷す。春秋六十有二。臨終の際、正念虧くる無く、顔色怡悦して、瞻矚有るに似たり。北首面西し、奄然として化す。

【語釈】

【宅生以下四句】『淮南子』精神訓「故心者、形之主也。而神者、心之宝也。形勞而不休則蹶、精用而不可竭。是故聖人貴而尊之、不敢越也。」

【上善】至善。『老子』八「上善若水、水善利万物而不浄、処衆人之所惡。故幾於道。」

【殷繁】非常に多いさま。『洛陽伽藍記』卷三・景明寺「暨皇居徙鄴、民訟殷繁。」

【風瘵】病氣。『詩』大雅・瞻卬「邦靡有定、士民其瘵。(伝)瘵、病也。」

【八林】『論集』一三八は、これを沙羅双樹(仏の入滅せる所の林の名前)とする。

【梁木其壞】潘岳・楊仲式誄「魂兮往矣、梁木実摧、嗚呼哀哉。」(『文選』卷五六) 大通禪師(神秀)の入滅の際にも、「椳は崩れ梁は壞れ、雷は働き雨は泣く。」(荊州玉泉寺大通禪師碑銘并序)の記載がある。

【瞻矚】眼光。『世説』排調「王子猷詣謝萬。林公先在坐、瞻矚甚高。」

X 隆闡大法師の号を贈らる

【訓読】

悲しいかな烈烈たる歳陰、蒼蒼たる天色。乾や何ぞ負ける、我が惟良を殲す。業や何ぞ孤ならん、茲の賢哲を喪ふ。豈に直だ悲しみの四部に盈ち、鹿苑の荒涼たるを嗟くのみならんや。抑ひは亦た両宮に哀悼して、蜂台の閑寂なるを痛む。

猶は是れ俯しては天睨を迴らし、載ち仙豪を紆<sup>ま</sup>げ、遠く恩波を降し、爰に制贈を加ふ。神龍元年の勅を奉じたるに、「実際寺主懷惴、居を三界に示して、遠く六塵を離れ、心境を虚空に等しくし、榮枯を物我に混ず。紺宇に棟梁し、縹徒に領袖たりて、杖錫の規模を包み、乗扈の懿躅を躡む。已に寂滅に帰し、褒揚に待つ無しと雖も、然れども寵は友于に洽<sup>あまね</sup>く、縉礼を忘るる無し。隆闡大法師を贈るべし。主者施行せよ。」と。上人は至徳<sup>いっ</sup>聿脩し、良因果著せるを以て、故に天成烈を降し、用て芳規を讃し、追遠慎終し、生榮死贈するを得たり。淨刹を光輝し、塵芥を歴りて長く存し、玄門を旌賞し、河山と共に永久なるべきに足れり。弟子大温国寺主思莊等、並に攀号し慮に積み、哀慕懷に居る。覆護を嗟くに時無く、音顔を仰がんとして日靡し。猶は恐る居諸遠ざかり易く、淑善湮<sup>い</sup>沉せんことを。敬んで清徽を想ひ、茲の玄琰に勒す。詞に曰く、

〔語釈〕

【烈烈】 寒さがきびしいようす。『詩』小雅・四月「冬日烈烈、飄風発発。(箋) 烈烈、猶栗烈也。」

【歲陰】 年の暮れ。庾信・歲晚出橫門詩「年華改歲陰、遊客喜登臨。」(『庾子山集注』卷三)

【乾坤何負】 『書』蔡仲之命「皇天無親、惟德是輔。」、『離騷』「皇天無私阿兮、覽民德焉錯輔。」

【惟良】 すぐれた人物。『書』君陳「嗚呼、臣人咸若時、惟良願哉。」

【業也何孤】 『論語』里仁「子曰、徳不孤、必有鄰。」

【蜂台】 もともと女王蜂の居所をいうも、転じて仏塔を指す遠くから仏塔を見ると、その形が蜂の巣に似ていることから。樊

忱・奉和九月九日登慈恩寺浮図応制「挿萸登鷲嶺、把菊坐蜂台。」(『全唐詩』卷一〇五)

【閑寂】 ひっそりとしたさま。江淹・泣賦「直視百里、処処秋烟、閑寂以思、情緒留連。」(『江文通文集』卷一)

【天睨】 天眷。天のめぐみ。『書』大禹謨「皇天眷命、奄有四海、為天下君。」

【仙豪】 仙毫。皇帝の用いる筆。劉禹錫・謝手詔表「特紆睿思、親灑仙毫。降自九重、粲然五色。」(『劉禹錫箋証』卷十一)

【恩波】 皇帝の恩沢。丘遲・侍宴樂遊苑送張徐州應詔詩「參差別念拳、肅穆恩波被。」(『文選』卷二十)

【神龍元年】 西紀七〇五年。

【杖錫】 僧が錫杖をついて行脚すること。廬山諸道人・遊石門詩

序「釈法師以隆安四年仲春之月、因詠山水、遂杖錫而遊。」(『全晉詩』卷二十)

【磬躡】 すばらしい業績。

【乗杯】 乗杯。水上を舟で行く。『梁高僧伝』卷十、神異下・杯度伝「至孟津河、浮木杯於水、憑之度河。」(大正五十・三九〇中)

【主者施行】 『唐令拾遺』公式令第十一条にこの語が見える。

【聿脩】 遵い、修める。『詩』大雅・文王「無念爾祖、聿脩厥德。」

【成烈】 功業。『書』畢命「欽若先王成烈、以休于前政。」

【追遠慎終】 きちんと葬祭を行う。『論語』学而「曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。(注)孔曰、慎終者、喪尽其哀。追遠者、祭尽其敬。」

【生榮死贈】 生前には尊敬され、死後に哀悼される。『論語』子張「其生也榮、其死也哀。如之何其可及也。」

【淨利】 淨土。江淹・傷愛子賦「信釈氏之靈果、歸三世之遠致、願同昇於淨利、与塵習兮永棄。」(『広弘明集』卷二十九、大五二・

三四二下)

【旌賞】 はめたたえる。『梁書』処士伝・何胤「昔荷聖王眚識、今又蒙旌賞、甚願詣闕謝恩。」

【玄門】 ここでは仏教を指す。慧遠・三報論「推此以觀、則知有方外之賓、服膺妙法、洗心玄門。」(『弘明集』卷六、大五二・三四下)

【攀号】 哀悼する。『南史』梁本紀下「論曰、……元帝居勢勝之地、啓中興之業、既雪讎恥。且応天人。而内積猜忍、外崇矯飾、攀号之節、忍酷於臨年、定省之制、申情於木偶。」

【覆護】 加護。まもる。『後漢書』東平憲王蒼伝「上疏歸職曰、臣蒼疲篤、特為陛下慈恩覆護、在家備教導之仁、升朝蒙爵命之首。」

【音顔】 音容。声と顔。謝靈運・酬從弟惠連詩「巖壑寓耳目、歛愛隔音容。」(『文選』卷二十五)

【居諸】 日月。光陰。『詩』邶風・柏舟「日居月諸、胡迭而微。」

【清微】 美德ある行い。『書』舜典「清微五典、五典克從。(孔伝)微、美也。」

## XI 銘

### 〔訓読〕

娑婆の種寛、賢劫の能人。三祇妄に弥ち、五分真を祈む。相に即き相を離れ、身を非とし身を是とす。猶ほ慧棧を施して、広く迷津を濟す。其一。十方化備はり、双林滅度す。三界空虚にして、四生哀慕す。正教既に隠れ、微言遽かに斲

く。式て先哲（哲）を啓き、用て後悟に資す。其二。芳猷いよく広く被り、至烈いよく弥さか殷さかなり。青眸聖を演べ、白足真を呈す。遠く蕝芥を導き、遐かに墨塵を宣ぶ。玄門絶えず、代々（世）其の人有り。其三。猗歟あゝ令徳、遠く前英を嗣ぐ。声は四部に高く、誉は三明に重し。慈は有識に周く、智は無生に契かなふ。法雲葉落して、道樹滋榮す。其四。豈に図らんや宿殃、師資遽に亡ぶ。軋けん（乾）や何ぞ負ける、我が惟良を殲す。徒に授几を嗟き、空しく伝香を念ふ。夫の勝縁に非ずんば、孰か恩光に答へん。其五。邈かなるかな垌野、慈顔壙側にあり。敬んで誠心を発し、爰に淨域に憑る。真容は湛粹、楼台は歸ききよく疑たり。希はくは此の善根の、遠く明徳に酬いんことを。其六。

天宝二年歲次癸未十二月景寅朔十一日景子建つ

【語釈】

【三明】 仏や阿羅漢のもつ三種の神通。知恵のはたらきをもつて

愚闇を破るので三明といい、三達ともいう。

附 龍興大德香積寺主淨業法師靈塔銘并序

【釋文】

大唐龍興大德香積寺主淨業法師靈塔銘并序正字畢彥雄文  
禪月西隱。戒燈東照。談眞利俗。稀代稱賢。智炬增輝。法師一人／矣。法師。諱象。字淨業。趙姓。族著天水。代家南陽。冠冕相輝。才名／繼美。因官徙屬。今爲京兆人也。父廸。天馬監。沈默攸傳。安畀適／務。時英開出。弈葉於儒門。從法化生。獨鐘於釋子。法師即監之／仲子也。器宇恢疑。風儀宏偉。長河毓量。汪然括地之姿。秀嶽標／形。峻矣干天。

之氣。髻年慕法。弱冠辭榮。／

高宗忌辰。方階落彩。帔緇七日。旋登法座。觀經疑論。剖析玄微。／念定生因。抑揚理要。法師夙棹玄津。早開靈鍵。入如來密藏。踐／菩薩之空門。凡所闡揚。無不悅可。歎未曾有。發菩提心。稟其歸／戒者。日逾千計。法師博濟冥懷。沖用利物。嘗以大雄既沒。法僧／爲本。每至元正創啓。周飾淨場。廣延高僧。轉讀眞誥。游興勝會。／法服精鮮。受用道資。出於百品。預茲位者。應其成數。所施之物。／各發一願。願力弘博。量其志焉。風雨不已廿餘載。菩薩以定慧／力而大捨法財。此之謂也。無適非可。住必營建。厥功居多。思力／如竭。

粵延和元年龍集壬子而身見微疾。心清志凝。夫依風以／興。隨煙而散。來既無所。去復何歸。夏六月十五日。誠誨門賢。端／坐瞪視。念佛告滅。嗚呼。生歷五十有八。卽以其年十月廿五日／陪窆于神禾原大善導閣梨域內。崇靈塔也。道俗闢湊。號惋盈／衢。不可制止者。億百千矣。門人思頊等。乃追芳舊簡。撫美遺編。／永言風軌。思崇前迹。空留鎖骨之形。敢勒鉢衣之石。其銘曰。／

佛日既隱。賢雲乃生。傳持正法。必寄時英。時英伊何。猗嗟上人。／損軀利物。愛道忘身。磨而不磷。涅而不緇。博濟羣有。是真法師。／定慧通悟。檀那上施。願力弘廣。成無住義。應眞而來。代謝而往。／哀哀門人。撫膺何仰。靈德若在。休風可想。敢勒遺塵。銘徽泉壤。／

開元十二年甲子之歲六月十五日建

〔訓読〕

大唐の龍興大徳・香積寺主浄業法師の靈塔銘并に序。正字畢彦雄の文

禪月は西に隠れ、戒燈は東に炤す。真を談じて俗を利し、代に稀にして賢と称され、智炬もて輝きを増すは、法師一人なり。法師、諱は象、字は浄業、趙姓なり。族は天水に著れ、代々南陽に家す。冠冕相い輝き、才名美を継ぐ。官に因りて属を徙し、今京兆の人たり。父の廼は天馬監なり。沈黙傳くる攸にして、安界務めに適う。時英間出して、儒門

に奔葉たり。法より化生するは、独り釈子に鐘<sup>あつ</sup>まる。法師は即ち監の仲子なり。器宇は恢疑にして、風儀は宏偉なり。長河の毓量、茫然として地を括るの姿、秀岳の標形、峻たること天を干すの気あり。髫年にして法を慕い、弱冠にして榮を辞す。

高宗の忌辰に、階に方<sup>あた</sup>り彩を落とし、緇を帔<sup>き</sup>ること七日にして、旋りて法座に登る。觀經・疑論は、玄微を剖析し、念定の生因は、理要を抑揚す。法師、夙に玄津に棹<sup>さ</sup>さし、早に靈鍵を開き、如来の密藏に入り、菩薩の空門を踐む。凡そ闡揚する所は、悦可せざるは無し。未曾有なりと歎じて、菩提心を発す。其を帰戒を稟くる者、日に千計を逾ゆ。法師、博く冥懷を濟い、冲<sup>ひょう</sup>く用て物を利す。嘗に大雄既に没するを以て、法僧を本と為し、元正創めて啓くに至る毎に、周く淨場を飾り、広く高僧を延<sup>まよ</sup>き、真誥を転読す。洵りに勝会を興し、法服精鮮にして、受用の道資は、百品より出づ。茲の位に預る者は、其の成数に應ず。施す所の物もて、各の一願を発す。願力弘博にして其の志を量る。風雨已まざること廿余載、菩薩の定慧力を以て法財を大捨す、とは此の謂なり。適きて可に非ざるは無く、住<sup>とど</sup>まれば必ず營建す。厥の功居多なるも、思力竭くるが如し。

粵に延和元年龍集壬子にして、身に微疾を見わし、心清く志凝る。夫れ、風に依りて以て興り、煙に随いて散ず。來ること既に所無ければ、去るに復た何れに帰せん。夏六月十五日、門賢に誠誨し、端坐瞪視し、念仏して滅を告ぐ。嗚呼、生歴は五十有八なり。即ち、其の年の十月廿五日を以て神禾原の大善導闍梨の域内に陪<sup>へい</sup>遯し、靈塔を崇<sup>ほまれ</sup>くするなり。道俗、闡<sup>くわん</sup>湊して、号惋するもの衢に盈ち、制止すべからざる者億百千なり。門人の思頃等、乃ち芳<sup>ほまれ</sup>を旧簡に追い、美を遺編に摭<sup>ひら</sup>う。風軌を永言し、前迹を思崇す。空しく鎖骨の形を留め、敢て鉄衣の石に勒す。其の銘に曰く、

仏日既に隠れ、賢雲乃ち生ず、正法を伝持するは、必ず時英に寄す。時英とは伊れ何ぞ、猗嗟、上人ならん、軀を損て物を利し、道を愛して身を忘る。磨<sup>と</sup>げども磷<sup>うす</sup>からず、涅<sup>そま</sup>るも緇<sup>くろ</sup>からず、博く群有を濟うは、是れ真に法師なり。定慧通じ悟り、檀那<sup>たんな</sup>上<sup>なみ</sup>り施す、願力弘広にして、無住の義を成ず。応真にして來り、代謝して往く、哀哀たる門人、膺<sup>おの</sup>を撫

して何をか仰がん。靈徳在るが若く、休風想うべし、敢えて遺塵を勒し、微を泉壤に銘さん。

開元十二年、甲子の歳、六月十五日建つ

(織田顯祐)